

諏訪湖を愛した オオワシ「ゲル」の記録



諏訪湖クラブ
長野県/地域発 元気づくり支援金事業



ごあいさつ

諏訪湖は古くから地域に住む人々に限りない恵みを与えてきました。同時に諏訪湖は多くの生きものが世代をつなぎ複雑な食物網しょくもつもうの形成によって常に均衡きんこうある湖になろうとしてきました。一掬ひとすくいの湖水にも無数の小さな命いのちが宿やどる諏訪湖、それはお互いに補完し合う命いのちの揺りかご。そんな湖を私たちは大切に見守り続けていきたいものです。

諏訪湖クラブでは先に「諏訪湖に学ぶ」の冊子を出版しました。内容は諏訪湖に係わる自然、水質、生物、治水、保全対策、文化など、総合的な冊子でした。今回制作したこの冊子、「諏訪湖を愛したオオワシ『グル』の記録」は、諏訪湖クラブ会員であり、日本野鳥の会前諏訪支部長でもある林正敏さんが、1羽のワシについて紹介した極めて興味深い内容のものでした。

平成8年(1996)に諏訪湖に初飛来したオオワシは、その後も冬の使者としてロシア極東きょくとうから諏訪湖にやってきて23年間にもなりました。その間にはアクシデントに見舞われ、衰弱すいじやく、運よく救助されて、約50日間の飼育から再び自然に戻されました。このワシは「グル」の愛称で親しまれ、その生きざまに感動した人たちにより詩や短歌、小説など、文芸で扱われ、絵画や彫刻などのモデルにもなりました。

「この冊子で紹介された内容はその一部にすぎません。重い病をおして湖岸に何度も立ち「グル」に生きる勇気をもらい、人生を全うされたご婦人もいらっしゃいました。1羽の鳥が与えた影響がいかに大きかったか、その一端いったんでも形に残す意義があると考えこの冊子を作りました」とは、この冊子を書かれた林正敏さんの言葉です。ご家族と一緒に「グル」を話題にさせていただきながら、身近な諏訪湖をよりよい湖にして欲しいと願っています。

最後になりましたが、本冊子作製に当たっては、長野県の「地域発 元気づくり支援金」の交付をはじめ、岡谷エコーロータリークラブ様、マリオくらぶ様のご支援を得ました。深く感謝申し上げます。

諏訪湖クラブ会長 沖野 外輝夫

目 次

ごあいさつ p1

目次 p2

◆オオワシという鳥

オオワシの生態 p3

オオワシの子育て p4

長野県内のオオワシの記録 p7

◆「グル」という名のオオワシ

諏訪湖に定着した1羽のオオワシ「グル」 p8

手記 孤高に還る 林正敏 p9～p19

懸命な初期治療で救われたオオワシ p20

グルの飼育日記 p21～p23

◆放鳥後、ふたたび諏訪湖の主に

「グル」が選んだ諏訪湖周の条件とは p24

「グル」の年譜 p25

グルが好んだ着氷場所 p26

新聞が伝えたあの日のグル p27～p28

もっと知ろうグルのこと p29

スケッチ帳から p30

グルの飛行メモ p31～p32

レンズが捉えた間近なグル p33～p45

羽の経年変化 p46

◆オオワシなど猛禽を守る

オオワシを捕獲した時代 p47～p48

オオワシの死因トップは鉛中毒 p49～p50

「10年の軌跡、オオワシ回帰展」を開く p51～p52

オオワシに配慮、砂防えん堤工事が一時休止 p53～p54

電力2社が野鳥の感電防止に動く p55

◆オオワシ「グル」と地域の人とのふれあい

文化に一役買ったグル p56

神明小学校児童が10年目の奇跡 p57～p58

グルがマンガに登場 p59～p60

「こどもたちの彫刻コンクール」でグルの作品が金賞に p61

短歌や俳句に詠まれたグル p62

オオワシ「グル」が大きな絵手紙となる p63～p65

最高級の腕時計にグルの舞い姿 p66

「グルのTV番組」に努力、オペラ歌手の佐藤しのぶ p67

エッセイ、グルが教えてくれたこと — 命のバトン 小林節子 p68

ワシに焦がれて p69

編集後記 p70



■ オオワシの生態

オオワシ 英名 Steller's Sea Eagle 学名 *Haliaeetus pelagicus*
タカ目 タカ科

【形態】

日本に棲む猛禽類では最大の種
全長はオス 90 cm、メス 100 cm位
翼長は 56 - 65 cm 体重は 5 - 9 kg
嘴は大型で湾曲し、長さは 66 - 75mm もあり
オジロワシ 46 - 55mm やイヌワシ 38 - 44mm と比べてもかなり大きい。羽色は黒色と白色、嘴や足はオレンジ色で美しいワシです。

【分布】

夏季にロシア極東（カムチャッカ半島サハリンを含む）で繁殖し、冬季になると越冬のため南下、日本では主に北海道に飛来し、少数が本州に渡るほか、北海道ではまれに周年生息する個体もいます。日本以外では朝鮮半島にも渡ります。

【生態】

海岸や河川、湖沼周辺に生息します。渡りの最中や越冬地では小規模な群れをつくり生活する事が多い。主に魚を食べますが鳥や大型哺乳類の死骸なども食べます。上空や高木、岩場などで獲物を探し、繁殖期には樹上や断崖に大きな巣を作り、4 - 5 月ころ 1 - 3 個の卵を産みます。

【人間との関係】

開発による生息地の破壊や獲物の減少、狩猟による動物の死骸を食べ、鉛弾による鉛中毒などにより生息数は減少しています。日本では、昭和 45 年（1970）に国天然記念物、平成 5 年（1993）に絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定。

長野県では、平成 27 年（2015）に絶滅のおそれのある野生動物をまとめた長野県版レッドリスト（改訂版）に初めてオオワシを記載。県内ではライチョウ（絶滅危惧ⅠB類）よりも地域絶滅への危険度が高い絶滅危惧ⅠA類に指定され、県内でも鉛中毒が危ぐされるとした内容が初めて明記されました。



諏訪湖の氷上にたたずむ
オオワシ「グル」



県のリストにオオワシ追加

■ オオワシの子育て

オオワシの子育て期間は約2カ月、卵の^{ふか}孵化は5月中旬から6月中旬ころ。卵は青白色で^{はんもん}斑紋はなく産卵数は普通2卵ですが1卵または3卵のこともあります。大きさは6cm×8cm、重さは160gもあります。普通のニワトリの卵は平均60g位ですから2.6倍もあります。



産卵した親鳥と卵



通常では2個の卵を産む



生後約1カ月のオオワシのひな

この3枚の写真は繁殖の参考写真です。

北海道の円山動物園で飼育されているオオワシについて、動物園では飼育展示をするとともに、野生で生きられる姿が真に望ましいと来園者らに伝えながら、種の繁栄のための繁殖活動につとめています。

孵化したヒナは白い綿羽に包まれ、やがて灰色に変化し、さらに飛ぶことのできる褐色の羽へと変化します。親鳥は縄張り内の河川などで捕えた餌をヒナのもとに運びますが、ほとんどは魚類でその割合は80%、ほかには鳥類が10%などといえます。幼鳥は7月には親鳥の半分もの大きさに育ち、普通は8月中にほとんどが巣立ちますが、しばらくの間は親鳥のもとで餌の捕り方の訓練を繰り返しながら独り立ちへと向かい、厳しい自然のなかで生きてゆく術を身につけていきます。

生態	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
巣づくり	■												
産卵		■											
巣だち			■										
わたり												
越冬地									■				
わたり												

オオワシの子育てと移動

■ オオワシは海ワシ、その生息数

子育ては北の大地

日本列島に冬の便りが聞かれるころ、北海道を中心に北方からオオワシやオジロワシが飛来します。このうちオオワシはロシア極東、オホーツク沿岸に広がる森が彼らの故郷、世界でこの地域だけが繁殖地となっています。

長野県内には年間を通して生息するイヌワシやクマタカなど大型の猛禽類がありますが、これらは山野を生活の場としているため山ワシ類と言います。これに対しオオワシ、オジロワシなどは海辺や湖沼、大きな河川などに依存して生きるため海ワシ類と呼んでいます。

その海ワシの仲間のなかで最大の種がオオワシです。現在の生息数は4,600羽から5,100羽程度で、このうち北海道には約1,500羽が越冬のため飛来しているといわれています。(長野県版レッドリスト)

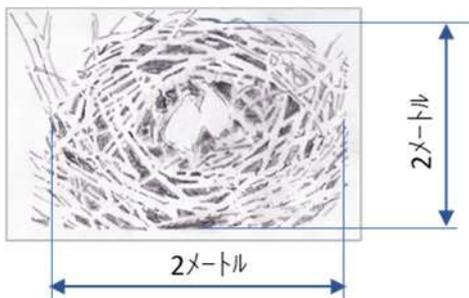
多くのオオワシが飛来する日本の越冬地の環境保全がいかに重要であるかが分かります。



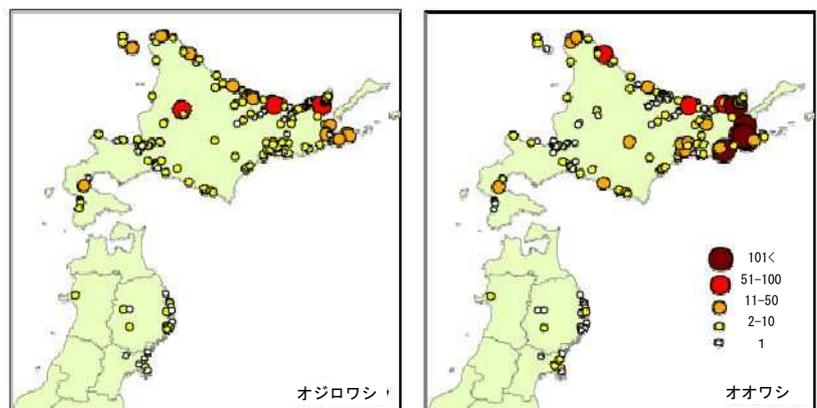
何年も使われた巨大な巣



巣立ち前のオオワシのヒナ



巣の大きさ
何年も使われた巣は巨大になる



オオワシ・オジロワシの越冬分布 2007年2月18日一斉分布調査結果 (オオワシ・オジロワシ合同調査グループ)

日本に飛来するオオワシなどの越冬地

■ わた 渡りのふしぎ

オオワシに^{かぎ}限らず渡りをする鳥たちは、長い生き方の中でそれぞれの種に^{しゅ}あった^{いどう}移動ルートを^{かくとく}獲得し現在に至っています。それは遺伝子に組み込まれた本能とも言えるものです。そしてどの鳥の渡りにも言えることは季節による南北への移動です。日本での地球規模の渡りには大きく分けて二つがあり、春に南方から渡ってきて繁殖する夏鳥と、秋の深まりとともに南下して越冬地に向かう冬鳥があります。

では危険を^{おか}冒してまでなぜ長旅をするのでしょうか、理由の多くは未解明ですが、コースについては徐々に研究が進み、^{ほかく}捕獲した鳥に足環や首輪を付けての標識調査や、発信機を装着して人工衛星で追跡するなど、一部の鳥では渡りのコースが特定できるようになりました。こうした研究の^{ちくせき}蓄積によって渡りの中継地や生存率、種の寿命など保護に欠かせない科学的な資料が得られるようになりました。

オオワシの渡りについてみてみましょう。オホーツク沿岸の限られた環境で子育てを終えた10月ころ、すでに独り立ちをした若いオオワシを含め一斉に南下が始まります。

その渡りはロシアの沿岸を南へ移動し、アムール川の流域付近からサハリンに渡り、ここから北海道に飛来する太いルートが知られています。渡り調査にかかわり、北海道で複数のオオワシを捕獲、^{やましなちょうるいけんきゅうしょ}放鳥した山階鳥類研究所の当時の研究員、佐藤文男さんが平成11年(1999)に岡谷市内でオオワシの生態について語られ、そのなかで興味深い話をされました。それは北海道に渡ってきたオオワシが、再び北上し北方四島の^{くなしりとう}国後島、^{えとろふとう}択捉島などに渡るといいます。本格的な寒さを迎えるまで、サケなど豊かな餌場で過ごし、再び北海道に帰ることが分かりました。



渡りは上昇気流に乗るなどエネルギーを効率よく使って移動します



オオワシの生息地と渡りのコース

■ 長野県内のオオワシの記録

これまで長野県内にオオワシが飛来した記録はかなり以前からありましたが、その飛来はシーズンを通した越冬記録が少なく、短期の観察例が中心といえます。古く江戸時代の文献にはオオワシらしき記載もありますが、種名ではなく鷲とだけ記され、オオワシを確認できる資料はなかなか見つかりません。けれども明治以後になるとオオワシ飛来の確かな記録がでてきます。



昭和 51 年(1976)冬、
諏訪湖上で死んで発見♀幼鳥
(下諏訪町の諏訪湖博物館所蔵)

その中の一つ、明治 26 年(1893) 2 月 5 日、諏訪市湯の脇で当時は狩猟鳥であったオオワシ雌の幼鳥が採集されました。採集者は上諏訪町長を務めた金井汲治で、金井は高山蝶の研究で知られ、論文を出したほどの蝶の研究者です。また鳥類についても諏訪湖に飛来した鳥を調べ、その記録が残されています。金井がどんな方法でこのオオワシを採集したのかは分かりませんが、幼鳥とはいえ大きさは成鳥とほぼ同じです。金井はこれを研究用に仮剥製にしました。約 130 年たった今もこの標本は岡谷市の林正敏宅で保存されています。これを含めて諏訪湖周辺では約 20 例が確かめられています。



一世紀以上も過ぎた金井標本は保存状態もよく羽毛の退色もない
(林正敏所蔵)

諏訪湖以外でオオワシが観察された事例は、日本野鳥の会長野支部がまとめた「長野県鳥類目録」で知ることができます。昭和 59 年(1984) 12 月に飯山市蓮の上空を通過する姿が確認され、翌 60 年(1985) 1 月には小布施町の千曲川の中州で下りていた姿が見られ、平成 2 年(1990) 1 月には長野市真島の千曲川原で感電したとみられる若鳥の死体など数例がありますが信州ではオオワシが越冬生活するにふさわしい水辺の空間が限られているために、飛来は極めて少ないといえます。

■ 諏訪湖に定着した1羽のオオワシ「グル」

ここからは諏訪湖に定着した1羽のオオワシの記録です。



日本画のようなグルの舞い姿

平成8年(1996)1月19日のこと諏訪湖上に若い、それも北方から初めて飛来したと思われるオオワシが観察されました。のちに「グル」と呼ばれるワシで、多くの人たちに親しまれ、関心の目が向けられることとなります。このオオワシが平成11年(1999)1月4日、冷たい湖に落ち衰弱していたところを救助されました。幾人もの人が救いの手を差し伸べ、49日の介護をへて、ふたたび大空に戻っていきました。

このワシは、初の飛来から実に23年間も諏訪湖に飛来し、その雄姿に多くの人が感動し、楽しみ、励まされました。

1羽のオオワシの生きざま、人々の思いにふれてみました。



「強敵には数で」とばかりに「グル」(矢印)の周りに集まったカラス

◇ 天空に舞うワシ

1羽の巨大なワシが早暁の冬空を翔る。両翼の幅2m以上、体重は優に6kgを超える。けれどもいま目に映るその姿は天空に流れる一粒の塵ほどに小さく、瞬き一つただけで見失ってしまう、それほど的高度を飛んでいるのだ。諏訪湖をぐるり取り囲む山稜、その遙か上空を羽ばたきもしないで平然と強風に向かっている。なんとという勇壮な光景であろうか。信州でも冬の諏訪盆地はとくに寒い。氷点下10度をはるかに下回る寒気流のなか、時おり大きく弧を描く。鮮烈きわめる厳寒の空で、眼光鋭く四方に獲物を探し、全身みなぎるほど研ぎ澄ました感覚で生きる野生、これを仰ぐことが私にとってこの上ない冬の愉しみであり、憧れとなった。

あれからもう16年が経つ。湖上に落ち衰弱して見つかったオオワシを保護して自宅で49日間、懸命に介護飼育をした甲斐あって、猛禽本来の猛々しい生気を回復し手元から飛びたっていった。人の手を離れ再び自由の身になったその鳥こそ、いま私の頭上を翔けているこのオオワシなのだ。

これまでに保護された鳥や獣たちをたくさん自然に返してきたが、放した後の生死は残念ながら知りたくても知る術がない。プライベートな時間をかなりさいて懸命に介護治療しても、放した時点でその後の情報はぴたりと途絶える。思いによっては、そのあっけなさがかえって清々しかった。



グルの精悍な顔絵 (林正敏・画)

それに引きかえ天空を舞っているあのオオワシはどうだ。繁殖地のロシア極東との移動をくり返ししながら、魚や鳥、ときにアザラシやシカの死肉を食い、命を繋いでいるという。想像を超えた過激な世界に再び舞い戻った鳥に、こうして毎年出会えるのだ。

あのワシには介護をとおして私の匂いが染み着くほど触れた。オオワシもまた40度以上の熱い平常温を私の指先にしっかり記憶させてくれた。その詰まりつまった思い出が何一つ失われないなか、時を経てもこうして出会うことができる。それは私にとって奇跡以外の何者でもなかった。

◇ オオワシが諏訪湖に飛来

ことの発端は平成8年(1996)にさかのぼる。

その年の1月9日、下諏訪町の高木湖岸で湖上を悠然と舞う一羽のオオワシを見つけた。

オオワシの成鳥は黒褐色と純白の羽毛で、口ばしと足はオレンジ色という猛禽にしては珍しく美しい配色だが、そこで見たオオワシはトビのように茶褐色で、尾羽はゴマ塩のように白く濁った地味な姿だった。一見して誕生後に初渡来した若い鳥であると判断できた。それでも大きなワシ一羽が諏訪湖を餌場に居ついたことで、湖に息づく鳥たちは、いつワシに急襲されるか分からない緊迫感が湖上に浮かぶカモたちの姿から見てとれた。

幸運なことに、このオオワシは翌年もその次の冬も諏訪湖へ飛んできて、年ごとに成鳥に向かって変身する姿をレンズを通して楽しませてくれた。寒い湖岸に一人立って悦に入る自分に関心をむける人などはなく、まして私の目線のずっと先に、どでかい猛禽のオオワシがいようなど誰も気が付かない、ある意味で安心できる環境におかれていた。

◇ オオワシを保護

このワシの観察を始めてから3年後の平成11年(1999)、そのころ私は地元の新聞社に勤め、取材部に所属していたので正月ものんびりする暇はなく、三日も取材の対象があれば出歩いていた。

そして4日のこと、取材から戻ってパソコンを立ち上げていたとき、向かいの女性記者が自分への電話を知らせてくれた。受話器を耳にあてるや「林さん

ですか！オオワシが諏訪湖に弱って浮いていますよ！」、それは私も知らない人からの通報だった。半信半疑のまま教えられた横河川河口近くの諏訪湖岸に急行、そこで目に飛びこんだ鳥はまぎれもないオオワシだった。

水際にいたワシは明らかに衰弱とみてとれたため保護する必要があり捕獲を即断した。けれども近寄るとワシは人の手に陥るまいと、あらん限りの威嚇行動で抵抗した。後ずさりして逃げながら、尻もちをついた恰好で巨大な翼を目いっぱい広げ鋭いかぎ爪と嘴を開け、もの凄い様相で防御した。

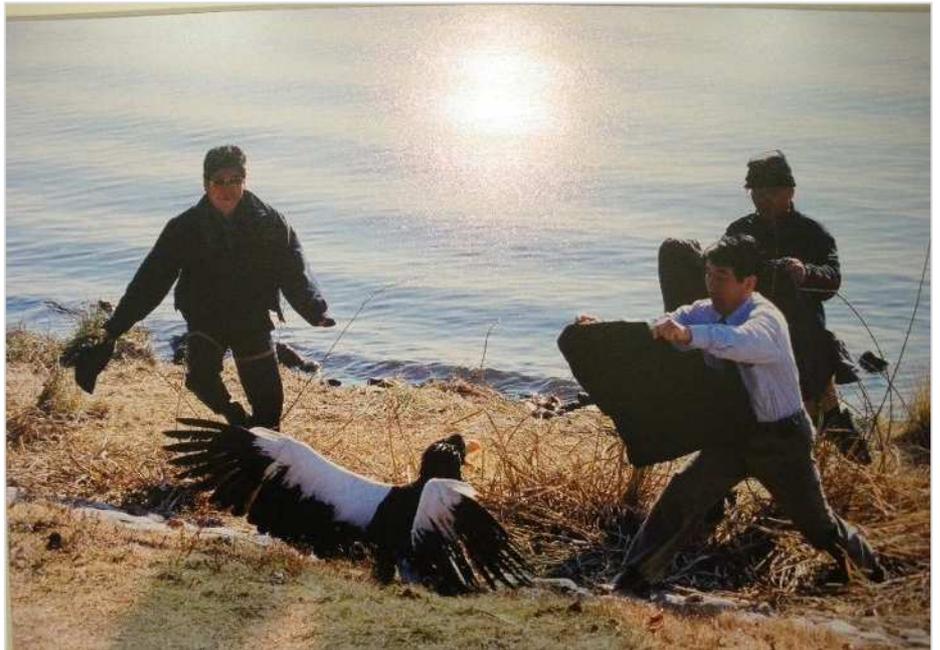
捕獲する道具を持ち合わせていなかった私は、とっさにブレザーを脱ぎワシの頭に被せて捕獲を試みたが、大きな爪があっさりとこれを払いのけた。上着を拾って再び挑戦し、ようやく衣服がワシの頭を覆ったのは三回目であったか。視界を失ったオオワシの背に、さらに現場にいた協力者が一枚二枚とジャンパーを被せたところで抵抗がピタリと止んだ、精魂尽きたのである。



諏訪湖に弱って浮いたオオワシ

◇救護ボランティアの思い

力の象徴のような強大なこの鳥に何があったというのか。オオワシは大陸からの寒気団とともに日本へ渡ってくる。大半は越冬の拠点となっている北海道に居とどまるものの、ごく一部は津軽海峡を越えて本州に南下する。この一羽もその仲間で、本州のほぼ中央に位置する中部山岳圏を飛行中諏訪湖を見つけ降り立ったのだ。



逃げ場を失ったワシに最後の捕獲作戦

巣立ったヒナが自立すれば親との縁は失われ自力で渡りにつく。同時に二羽の親も番の共同生活は解消され、それぞれの越冬地を目指して南下し独身で過ごし、春に故郷の繁殖地で再会するまで個々に生きるのだ。その点、狩りをしないで植物質を食べて生きられるハクチョウは夫婦睦まじく終生寄り添って生きられる。しかし、肉食系のオオワシには潤沢な餌の保証はどこにもない。夫婦それぞれに熾烈な餌の奪い合いをしながら、べつべつの場所で厳しい冬を乗り切って暮らす、これが猛禽故の現実であり、掟なのだ。

数少ないオオワシは現在国の天然記念物であり、絶滅危ぐ種にも指定された極めて貴重な鳥である。私は何としても助けてあげたいという使命感に駆られていた。これまで県野生鳥獣救護ボランティアとして救助活動で手掛けた猛禽類はトビ、オオタカ、ノスリ、ハイタカ、ツミ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、フクロウ、トラフズク、コミミズク、アオバズク、オオコノハズク、コノハズクの13種類で、飼育した数はおよそ50羽になる。自分ではそれなりに経験豊富だと思っていたのだが、オオワシは初めてである。これから先も、オオワシに接する機会などまずはあるまい。そうであればなおさらのこと、専門家の指導を仰いででも、この手でこのワシを大空に返してあげたいと、妙な欲望にかられた。これまで野生動物の介護で心得たすべての知識を出し切ってもこの鳥を治療し、自然に戻してやりたかった。

そんな強い思いの裏には過去の苦い体験がある。昭和59年(1984)の3月初旬、諏訪市の衣ノ渡川河口の湖上に大きな鳥が浮いているのを当時の信州大学理学部付属臨湖

実験所の職員が発見し、所長であった沖野外輝夫先生から「でっかいタカが死んでいるから来てみて！」と電話で知らされた。行ってみると驚いたことにそれは若いオオワシだった。外傷は見当たらず、死因も定かでない。衰弱時に発見できたとしたら助かっていたかもしれず、ワシの無念さを思い、私は連夜にわたってこの死体を蘇よみがえらせようと剥製作りに挑戦した。完成した標本は諏訪湖で食物連鎖しょくもつれんさの頂点に生きる鳥として、湖の自然を学ぶ恰好かっこうな資料になると考え、下諏訪町にある諏訪湖博物館・赤彦記念館に寄贈きぞうした。いま同館の二階には諏訪湖を背に、このオオワシが展示されている。

◇ オオワシの介護かいごが始まる

諏訪湖で無事保護ほごできたオオワシは、その日のうちに専門医の診断を受けることができた。

持ち込んだのは岡谷動物病院である。院長の佐々木厚先生も「オオワシは初めての経験です！」と言いながら、4名のスタッフと共に懸命に治療を施してくれた。

そこでの所見は心拍数 160、不整脈なし、呼吸音は正常、骨折脱臼なし、栄養状態えいようじょうたい80%、低タンパク血漿マイナス、貧血あり・・・などだった。かなり衰弱していたため直ちに酸素吸入さんそきゅうにゅうとともに、ビタミン、乳酸リンゲル液、抗生剤、ミネラルなどが点滴投与され、体温が低いいため保温が施され、血液検査が行われた。

レントゲン検査では外科的な疾患は認められなかった。佐々木院長も貴重な鳥であることを十分に心得られていて、その命を救うために徹底的な診療てつていきを施してくれた。



オオワシの診断と治療（岡谷動物病院）



治療を終え戻されたオオワシ

その間ワシはほとんど動かずにいた。

家に運んだときのオオワシは死に損ねた魚みたいな状態だった。立ち上がることもできず、うつろな目をしてうずくまるだけ、そこにワシの威厳はなかった。回復するまでの様子を見るため体重を計ったら 5.8 kg、翼を広げた長さは 2.1m、性別は雌だった。

飼育室にあてたのは私の家から約 200m 離れ、今は空き家となっていた実家だ。昔の家だから玄関は十五畳間ほどの広さがあり、天井までは約 4 m の吹き抜けとなっていた。巨大な鳥を飼うスペースとしては、これでもまだ狭い。気の毒だがワシには少し我慢してもらい、ここで体力を回復させてやることにした。外からの刺激をなくすため最小限の光だけ室内に入るよう工夫して、壁や窓には段ボールを張り巡らし、体を傷つけないようにした。

餌い始めは大変だった。まず餌を食べる元気がないために嘴をこじ開けて与える強制給餌を行った。巨大な嘴をどうやって開け、自分自身も怪我をしないように餌やりができるか思案した。ところが、指先で嘴をそつとなぞっていたとき意外な発見に気付いた。それは嘴の中ほどにある鼻孔から先端部までは堅く、嘴の合わせり目は刃物のように危険であるのに対し、鼻孔から顔寄りの合わせり目はまるで硬質ゴムのように柔らかく、嘴に挟まれても危険でないことがわかった。ここに真横から指を差し込むと隙間ができ、上嘴と下嘴を引くと巨大な嘴があんぐりと開いた。

餌はタラやクロメバルなどの魚のほか、肉類にビタミン剤を少量混入させ、小さな塊にしては喉元に入れてやる。餌の置き場所が浅いと吐き出してしまうため、思い切って喉の奥に差し入れ、さらに外側から揉み送るようにして食べさせた。

飼育を始めて間もなく室内が糞



餌用に仕入れた魚や肉



飼育していた部屋の清掃作業

で汚れ始める。肉食系の鳥の糞はまるで白ペンキのようだ。実はこの下痢状げりじょうの便こそが正常な糞である。オオワシを刺激させたくはなかったが 10 日間の放置が限界であり、掃除を余儀なくさせた。掃除といっても容易ではない、オオワシをいったん捕まえ隣室に移してから室内せいけつを清潔にする。同時にせつかく捕まえた機会をとらえて健康診断けんこうしんだんも行い、胸の左右にある大胸筋だいきょうきんの張り具合や体重の測定も行った。

◇ 順調じゆんちように回復かいふく

飼育して4日目のことだ。少し開けた戸の隙間すきまから覗くと、丸太の上ですくくと止まるオオワシが見え、さらに脇に置いてあったタラの白身を啄みはじめていた。

私は思わず「よし、いいぞ！」と呟いていた。明らかに危険な状態が遠のきつつあるようにみえたからだ。

この鳥が来てからというもの、寝ても覚めても頭の中はオオワシがどっかと居座ってしまった。夜は最終の姿をそっと確かめ、朝は薄明るくなったころ見に行くという日が続いた。



◇ 愛称あいしょうは「グル」

接近できたのは衰弱がつづく証拠

それほどの思いで介護していたオオワシには、ひそかに呼んでいた愛称があった。それは諏訪湖畔で助けた直後、帰りの車中で助手席に寝かされたオオワシがひと声「グルッ」と鳴いたのだ。本来の声は「ガッ、ガッ、ガッ」と太く大声だが、その声とは程遠く明らかに苦し紛れうめの呻き声だった。その呻きはオオワシが自身の体調の悪さを教えてくれたようでもあり、いつまでも耳について離れず、私はいつのまにかこのワシをグルと呼んでいた。

あくまでワシを飼っている間の、それも期限付きで極めて個人的なものだったが、うっかりマスコミの取材中に「愛称あいしょうは？」と聞かれ口走ってしまった。

後にこれが新聞の見出しで当たり前のように使われ、ネット上で全国に発信されるようになるとは、そのときは想像もできなかった。

◇ 餌用に生きたシャモ2羽が届く

飼育してから30日が過ぎた。オオワシは急速に回復している様子で、狭い室内を動きまわりながら、飛びあがる仕草しぐさをしたり、さかんに羽繕はづくろいを行ったりしていた。

食欲が増してきたワシのために、友人からは高級な牛肉の差し入れが届き、別の人からは生きたシャモ2羽が送られ、これはやむなく自分で絞めて与えた。

ワシのそんな回復の様子に安心する一方で、私はこの鳥を飼い始めた時から一番気にしていたことがあった。それは猛禽であるが故の能力を、飼育のなかでどう維持させられるかであった。

攻撃力で生きる^{もうきん}猛禽は常にパーフェクトな狩りの能力が求められる。それは同様に狩られる側にも言えることなのだが、能力の高さからしたら猛禽の場合は狩られる対象の比ではない。

長期にわたって飼育することで筋力の^{おとろ}衰えと、居ながらにして餌が与えられることによる野生の^{そうしつ}喪失、それに伴う攻撃力の低下など、懸念は多かった。餌の与え方ひとつみても課題は多い。自然界では毎日決まった時間に食事にありつけないのが常である。とくに猛禽の場合、悪天候で視界が効かないと狩りはできず、気象条件によっては3日、4日と食事にありつけないことだってあり得る。しかしこれが彼らの自然の姿なのだ。だからこそ、常にぎりぎりの^{かんきょう}環境のなかで^{えいびん}鋭敏な^{かんかく}感覚を^と研ぎ^す澄ましているのだ。



元気になったオオワシ「グル」

◇ ^{ひこうくんれん}飛行訓練を^{かいし}開始

狭い室内で運動できないため筋力の衰えは致命的で、狩りをする際の攻撃では逃げる獲物に追いつけない。狩りだけでなく過酷な渡りだって難しくなる。飼っているオオワシをいつ放せるのか、先延ばしするほど負い目も増えるのではと焦っていた。具体的に放せる見極めが必要と感じ、思いきって訓練を兼ねて屋外で飛ばせてみることにした。飛び立ったときの角度や羽ばたきから見た左右の翼の^{さんこう}均衡など、確認したいことが幾つかあったからだ。

そこで用意したのが直径5ミリの木綿ロープを50m。そのロープの一方の端をY字型にして布で両脚に結わえ、一方を係留することにした。飛ばす際の注意としては脚の脱臼を防ぐことで、ロープいっぱい飛びきったときの衝撃をいかに和らげるかであった。その対策としてロープの中間に二メートルの生ゴムをはさむことにした。

いよいよその日、飛行訓練の場所に選んだのは諏訪市豊田の水田地帯である。ここは^{しかい}視界を^{さえぎ}遮るものがほとんどなく、湖の方から吹いてくる風も飛翔の手助けになるはずだ。この放鳥訓練には最低2人が必要で、これを手伝ってくれたのは下諏訪町に住む日本野鳥の会の仲間、北澤千文さんだ。頼もしい助っ人で、北澤さんには他にも糞で汚れ

た飼育室の掃除など献身的に助けてもらった。

訓練場へ運んだワシは、まず田んぼに仰向けに寝かせて紐で両脚を結わえ締め加減を調整した。次に飛ぶ方角などを見定め、障害物などを確認し、向かい風も意識した。準備がすべて整ったためワシの体を反転して起こし、2本の脚でしっかりと地面に立たせてあげた。するとワシの表情が瞬時に変わったのがわかった。嘴をやや開きかげんにして射抜くような鋭い目で空を見据えた次の瞬間、大きく羽ばたいて飛び立った。ワシは弛んでいたロープを持ち上げながら、無風状態の中で50mを一気に飛んだ。ワシ自身にとって久々の飛翔であり一瞬ではあったが着地したときの顔は明らかに興奮し、大きな嘴を開いて呼吸を荒くしていた。ここでは数回やってみたが、上昇は地上わずか



衝撃を緩めるためにゴムを繋げた

2.5m程度、これが巨体を浮かびあげる精一杯の高さだった。それでもロープが伸びきるぎりぎりまで上昇カーブを描いたことで、その先の飛翔に大きく期待をもたせる結果となった。

◇ グルの体調に異変が

それからというもの私はいつ放鳥するか決断に迫られていた。ワシは体力が回復するごとに狭い室内で日に何回も飛びあがる。ひと羽ばたきで天井下まで飛び上がり壁にぶつかって落ち、また飛びあがる。これをくり返すうちに翼の同じ部位に打ち傷ができ、日増しに傷口が広がっていたのが心配だった。飼育を続けるとこの傷は確実に広がる、また回復が不完全なまま放せば再びどこかに落ち、それは命にかかわる。迷いは大きかったが私はこのワシに賭けてみることにし、飼育40日をもって放鳥すると決めた。

ところがその2日後、大きな不安を目前にした。鉛中毒によく見られる緑便を始めたのである。諏訪湖で鉛中毒によって保護したコハクチョウの飼育で経験していたため心配は一気に高まった。だが案じていても始まらず千葉県我孫子市にある山階鳥類研究所に相談したところ、北海道でワシ類に含まれている鉛濃度を専門に研究している神和夫先生がいることが分かり、先方に連絡をとってくれた。神先生はオオワシ、オジロワシの鉛被害がどう進んでいるかを調べ、対応している研究者である。私はすぐに電話をしたところ、神先生は「急いで血液を採って航空便で送ってくれば検査してさしあげます」と快諾してくれた。

その夜、我が家では飼育室から運んできたワシの採血が三人がかりで行われた。まずオオワシを仰向けに寝かせ、危険な爪のある脚を確保してもらい、頭部をそっと押さえ

て大きな翼を広げる。その羽毛をかき分けると皮膚の下に走る太い血管が確認できた。この血管に慎重に針を差し込み、1.5 ccを採血、この血液が凝固しないようにする専門の容器に入れて密封し、翌朝北海道に送った。検査の結果が待ち遠しかった。

2日後、神先生から連絡が入った。「林さん、こんなきれいな血液は今まで調べたワシでは初めてのことです。鉛の濃度は 0.009 マイクログラムで、この十倍あっても健康には問題はない」との嬉しい知らせだった。さらに「緑便は消化不良やストレスなど他の要因かもしれない」と伝えてくれた。これで放鳥することへの大きな障壁は消えた、あとはオオワシの生命力だけである、大空に放つ日を2月21日と決めた。

◇ 大空に飛び立つ

飼育中に数々のアドバイスを受けた山階鳥類研究所の佐藤文男さんにはグルに標識（足環）を付け放鳥にも立ち合ってもらえるよう伝えた。グルに装着される標識は鳥の戸籍簿のようなもので、これから先、「グル」がどこで再び捕まろうが仮に死んで見つかるが、足環に刻まれた国籍とリングナンバーによって年齢や渡りの経路などが明らかになる。

飼育中は幾人もの人から「オオワシを見たい」と言われたが、「野生にかえす鳥だから、ストレスは与えたくない」と協力していただいた。その人たちには、せめて放鳥場面は見てもらおうと電話で伝えた。

待ちに待った放つ日、千葉からは佐藤文男さんも我が家に到着し、さっそく持参した足環がオオワシの右足に取り付けられた。スチール製のリングには

「KANKYOSYO TOKYO JAPAN 150 - 0368」と刻印されていた。ここで最終の体重を測ったところ6.4

キログラムあり、飼育した約50日の間に600グラム増加していた。

放鳥場所は飛翔の訓練をした場所と同じ諏訪市豊田である。そこまでは「グル」の体を木綿の布に包み、頭だけ出し、これを抱えて運んだ。途中、「グル」は車中から見える空を睨みすえて何回かググッと体に力を入れ、頭を動かすなど、早く放せ！と言わんばかり、昂揚する気持ちを押しさえられない様子が直に伝わってきた。

現場には約20分弱で着いた。見ると田んぼを囲む農道に70人もの人が待ち受け、



放鳥では両手を合わせ祈る人の姿も

報道関係者^{ほうどうかんけいしや}だけで 10 人以上、異例^{いれい}な放鳥セレモニーとなった。集まった人のなかにはオオワシの落鳥を知らせてくれ、捕獲を一緒に行ってくれた写真家の加藤静さんとその仲間の人たちもいて、みんなが周りに集まってきた。

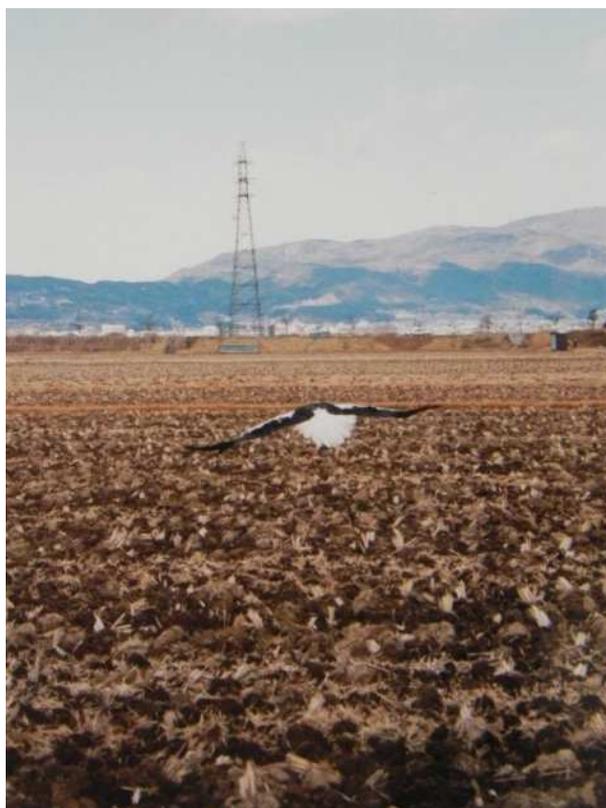
水田より少し高い農道を放鳥地とし見定め風を待った。しかし、巨体を浮かばせるに十分な風はないが、もうここで飛ばすしかなかった。諏訪湖の方角にワシを向けて地面に立たせると、佐藤さんはワシの両脚の爪が路面をしっかりと捉え、蹴り上がる準備ができていのかどうかを、エビのように腰を曲げ確認していた。佐藤さんは北海道でワシの渡り調査で、一度に 11 羽ものオオワシをロケットネットで捕獲し、標識を付けて放した経験を持つ専門家、さすがに凄^{すご}い気配りである。

そしてその瞬間がきた、私がそれまでオオワシの動きを封じるために両肩に当てていた手の力を緩めた瞬間だった。大きく羽ばたいたワシが地上を蹴って飛び立った。しかし、どこまでも低空飛行で水田に落ちそうな高さである。見守った人たちから「あがれ！あがれ！」という叫び声。するとワシは大きく左に旋回し諏訪湖とは逆の方向に飛び続け、放した場所から 700m程離れた県道上を走る電線に止まった。これだけ飛んでようやくその高さである。「また落ちはしないか！」私は双眼鏡をのぞきながら居てもたってもいられなかった。

間もなくワシが止まった周り^{まわ}にあつという間にカラスが集まり、ワシを取り囲んで

騒ぎたてている様子が見えた。ふと私は「これは結果的にカラスに助けられるかも知れない」と予感した。その思いは的中し、カラスの喧騒^{けんそう}にまくし立てられた「グル」は飛び立って高度を上げ、こんどは西山^{ふもと}の麓にある湖南地区の神社にそびえる大きなケヤキの頂^{いただ}きに止まった。ここへも数羽のカラスが追いかけていき嫌^{いや}がらせをしたため「グル」は再び飛び立った。

幸運^{こううん}にもこの一帯は山頂に向け平野から上昇^{じょうしょうきりゅう}気流がわき上がっているとみえ、やがて「グル」は弧を描きながら一気に高度をあげ始めた。見守った人達は誰一人として現場を離れることなく、小さくなった鳥影^{とりかげ}を必死^{ひっし}で追うなか、「グル」はとうとう峰の上空に達した。眼下に連なっている尾根筋^{おねすじ}を確かめるように 2、3 回行き来した。その姿も



人の手を離れ低く飛び去るグル

やがて一点の黒い粒^{つぶ}となり、かなたに消え去っていった。北緯^{ほくい}36度1分49秒、東経^{とうけい}138度5分7秒。これがオオワシ「グル」が自然に^{もど}戻った第二の出発地点となった。

◇ 放鳥^{よくとし}の翌年、グルが元気に飛来！

それからの一年はとてつもなく長く待ち遠しい日々であり、冬の到来^{とうらい}がこれほど待ちこがれたのも初めてである。

翌平成12年(2000)1月28日のこと、下諏訪町の高台で諏訪湖が見下ろせる場所にお住まいの日本野鳥の会会員片山智子さんが北の大地から諏訪湖に舞い^ま戻っているオオワシを発見、すぐさま私に知らせてくれた。程^{ほど}なくしてこのワシが「グル」であると確認された。自然界に^{かんぜんふっき}完全復帰したことに飼育者ならではの感動もあった。それは身震^{みふる}いするほどの嬉しさであった。

あれからもう16年の歳月が流れる。平成27年(2015)の冬、オオワシは何事もなかったかのように諏訪湖に飛来して大空を^か翔けている。友人のなかには「命を助けてくれた恩^{おん}を返しにやってくるのだろう」と話しかけてくる人もいる。確かに嬉しい言葉であるが、自分にとってそうした情緒的なことはどうでもよいのだ。それよりも、あの巨大なワシと過ごした日々、そして二度と^ふ触れあうことのない^{こうごう}神々しいまでの生身。その圧倒^{あつとうてき}的で濃く重い時間を共に過ごしたことを思い、今こうしてオオワシを仰ぎ見て、満たされた自分がここにいることに、あらためて^{きづ}気付くのである。

(平成27年発刊、同人誌、「窓」より)



平成12年、放鳥の翌年に飛来したオオワシ。「グル」と確認できたのは右脚のリングと後頭部にある白い斑紋だった。

このシーズンはグルの飛来が遅く、飛来の時期を過ぎていたため再来は望み薄と思われていた。1月28日の確認は最も遅い記録となった。



オオワシ「グル」が諏訪湖に再飛来

■ グルの飼育日記 平成 11 年 (1999)

月日	介護内容
平成 11年 1/4	午前 10 時前に「横河川先の湖岸でオオワシが溺れている」と連絡があり現場に急行し保護。午後に岡谷動物病院にはこび診察、治療をうける。レントゲン撮影、採血、抗生物質・ブドウ糖などの注射をし、応急措置をしていただく。異物の飲み込み、被弾などがなかったため自宅で保護飼育するとして諏訪地方事務所に連絡した。飼育場を確保する。 【体の測定：全長 92 cm、翼開長 210 cm、体重 5.8 kg、嘴峰長 83.9 mm】
1/5	強制給餌によりフナ 2 尾を与える。衰弱がなお続いている。
1/6	ストレス軽減に段ボールで飼育室の採光を最少限に調整。タラを強制給餌。
1/7	千葉県我孫子市の山階鳥類研究所（以下山階鳥研）に連絡しオオワシに詳しい佐藤文男氏からアドバイスを受ける「鉛中毒の可能性も否定できないのでしばらく様子を見るように」とのこと。飼育後初めてタラを自力で食べた。
1/8	放鳥に備え岡谷市から県教委を通じ文化庁に標識調査にともなう「天然記念物の現状変更申請」の問い合わせを行う。
1/9	飼育室（約 15 畳）の環境に馴れ始めた様子。タラ約 400 g を食べた。
1/10	止まり木にわずかな血痕、足指に傷をつくったため治療する。
1/11	魚屋でクロメバルを 1 箱購入。タラの残り 300 g を食べる。
1/12	クロメバル約 400 g を食べる。食後に全身を小刻みに震わせ羽音が響く。
1/13	山階鳥研の佐藤氏よりの連絡で「新潟県の風間辰男氏のオオワシ飼育では日に最低 500 g は必要」という。食べない場合は強制給餌でも与えた方が良くとのアドバイス。体重は 7～8 kg のため現状では放鳥は無理のよう。
1/14	クロメバル 400 g を食べた。強制給餌はワシを確保しないと困難で毎回の確保はストレスを増幅させるため当面は見合せとした。
1/15	クロメバル約 500 g を食べた。少し安心。
1/16	前夜に捕獲器に入ったネズミを与えるも、くわえて落とす。クロメバル約 700 g を食べる。飼育室は白い水様便で汚れたため、ワシを捕獲し別室に入れて清掃。この際に体重を計ったら 5.6 kg で捕獲時より 200 g 減量した。
1/17	新たにクロメバル 3 箱購入、600 g を食べる。5 日ほどの餌を確保する。大きなネズミを捕獲、皮をむき与えたが前回同様に食べなかった。
1/18	クロメバル 500 g を食べる。
1/19	クロメバル約 700 g を食べる。食欲は旺盛にみえる。
1/20	クロメバル 1.1 kg を食べる、これまでに最も多い。
1/21	クロメバル 600 g を食べる。今後のリハビリのため大型の施設を計画。諏訪湖ゴルフ練習場からネットの提供を受ける。
1/22	午前 6 時すぎ諏訪市公設市場でマグロの血あい約 2 kg、タラ 8 本入り 1 箱を購入。初めてのマグロだったが食べっぷりは良く 600 g を食べる。

1/23	タラ2尾を食べる。双方の翼角部が赤く室内の壁で打撲したとみられた。段ボールの補強が必要になる。早く自然に還してあげたい。
1/24	午前にタラ1尾を食べる、午後に衝突死したドバトの肉250gを食べる。
1/25	マグロ300g、夕方にタラ350gを食べる。
1/26	タラ800gを食べる。山階鳥研の佐藤氏に電話して標識装着の相談をする。翼へのウイングタグは国内では北海道など地域指定の装着であり難しい。ワシ用の足環を考えたいが、稀に太い脚の個体がいるため念のため太さ測定をしておいて、とのこと。
1/27	マグロ約1kgを食べる。諏訪市の諏訪グリーンライフに行き、たくさんのネットの提供を受ける。
1/28	諏訪市の公設市場でマグロの血あい1kgを入手、うち900gを食べる。
1/29	マグロ約800gを食べる。公設市場へ行くが不況でマグロの解体が少ないとのこと。餌の確保に苦労する。
1/30	杉山さんが魚を提供、北沢さんら4人と飼育室を掃除し厚紙を敷き直す。体重は5.8kgあったが胸筋の落ちが触診できた。
1/31	放鳥に備え飛行訓練を諏訪市豊田の水田地帯で行った。直径5mmほどのY字型の木綿ロープで両脚に木綿、生ゴムを使用した安全なリハビリ器具をつくり両脚を自由に動かせる形で固定。長さ50mの短距離で飛び上がりの様子を数回試みた。結果は高さ2m足らずだったが確実に上昇線を描いていた。マグロなど600gを食べる。
2/1	マグロ700gを食べる。小さな声でクツ、クツと鳴く。珍しく止まり木から棚、床などに飛び移った。
2/2	朝に250gを食べただけ、珍しく食欲はなかった。
2/3	この日も150gを食べただけだが、特に変調は感じられなかった。
2/4	マグロ650gを平らげ、問題はなかった。
2/5	マグロ600gを食べる。夜に北沢さんからタラ4匹の差し入れを受ける。
2/6	タラ700gを食べる。
2/7	タラ600gとマス1尾を食べる。
2/8	マグロ300gとタラ300gを食べる。山階鳥研の佐藤氏に連絡しワシの体力がかなり回復したことを知らせる。諏訪湖の結氷もなく湖上での採餌も可能。積雪も少なく周辺部で餌の確保できるなど自然条件が良いとして、放鳥条件を具体的にさぐることにした。
2/9	タラ650gを食べる。友人が餌用にステーキ用の牛肉を差し入れてくれた。
2/10	マグロ300gを食べる。山階鳥研の佐藤氏に14日に放鳥したいと連絡。日本野鳥の会本部からも連絡があり同様の内容を伝えた。放鳥場所は諏訪市豊田地籍に広がる水田を選ぶ。

2/11	牛肉 450 g とタラ 150 g を食べる。止まり木が倒れたため北沢さんと修復、同時に清掃、その際に幾つかの緑便 <small>りよくべん</small> が確認された。鉛中毒 <small>なまりちゆうどく</small> の症状にも緑便が確認されているため夜間に山階鳥研の佐藤氏に連絡。同氏は北海道でオオワシに詳しい黒沢信道獣医師に連絡しておくから直接話してほしいと言われた。
2/12	牛肉 500 g とタラ 180 g を食べる。北海道の黒沢獣医師に連絡したところ「消化器官の調子が悪くても緑便はする。重金属の調べをすれば分かるので1~2 cc送ってもらえば調べます。その際は凝固 <small>きようこ</small> しない試験管に採ってほしい」と。深夜だったが佐藤氏に電話を入れ、検査結果を待ちたいので放鳥は一週間ほど延ばしたいと伝えた。
2/13	タラ 400 g を食べる。知人が生きたシャモを刺し入れてくれた。
2/14	可哀 <small>かわい</small> そうだったがシャモを絞める。新鮮 <small>しんせん</small> な鳥肉 600 g を与えたところ目の前で食べた。
2/15	鶏肉 <small>とりにく</small> 450 g とタラの白子 <small>しらこ</small> 130 g を食べる。夜に知人が新たにシャモ 1 羽の提供 <small>ていきょう</small> を知らせてくれた。
2/16	鶏肉 800 g を食べる。岡谷動物病院の佐々木院長に連絡し血中の鉛の検査は未確認であることを確認。山階鳥研の佐藤氏から月末にはアホウドリの標識調査で鳥島に行くので採血を急いで欲しいとの連絡。
2/17	鶏肉 750 g を食べる。佐藤氏を通してワシ類の重金属を調べている北海道庁衛生研究所の神和夫氏が血液を1~2 cc送ってもらえば2日ほどで結果を送れるとのこと。岡谷動物病院の佐々木院長の協力をえて採血道具一式の提供を受け、夜に北沢千文、杉山直のお二人の協力のもと1.5 ccを採血、同時に翼の打撲傷の手当てをおこなう。
2/18	鶏肉 800 g を食べる。前夜に採血し凝固しないようパセリン処理したサンプルを妻が北海道へ空輸で送付手配し、神氏に送付を伝えた。
2/19	鶏肉 750 g を食べる。山階鳥研の佐藤氏に血液検査の結果が良ければ21日放鳥を決め、標識の装着と放鳥に来ていただくこととした。
2/20	早朝に諏訪市公設市場でマグロ 2 kg を入手、600 g を食べる。午後2時ころ北海道の神氏から検査結果の知らせがあり「血中の鉛濃度は0.009 マイクログラムで、これほど汚染の少ないワシは初めてだ、この10倍あっても鉛の含有は非事例であり健康への問題はない」と。また北海道以外での鉛調査も今回が初めてのケースと知らされた。
2/21	山階鳥研の佐藤氏を迎え「グル」の各部を測定し、足環 <small>あしわ</small> 「150-0368」を装着。放鳥場所の諏訪市豊田に行く。現地では報道関係者をはじめ大勢の人が見守るなか午前11時すぎ放鳥、「グル」は諏訪湖とは反対の方角に低空で飛び、住宅街の電線に止まったがカラスの群れが飛来し、追われるように飛び立ち西山裾 <small>にしやますそ</small> の神社のケヤキに止まったが追いかけてきたカラスの集団により再び飛び立ち、山に向かう上昇気流に乗って高度をぐんぐんあげ山の上空に上がり小さな点となり消えた。

■ 「グル」が選んだ諏訪湖周の条件とは

冬の諏訪を越冬地と決めたオオワシ「グル」、その条件とは何だったのでしょうか。

平成8年(1996)に初めてやってきたグルは、諏訪湖周辺をとり囲む山の上を数回飛んだだけで、本能的に最も居心地のよい場所を決めていたことでしょう。そこは湖の東側、下諏訪から諏訪市に連なる山。ここはいく筋もの急な尾根が諏訪湖に向けて張り出し、その尾根筋には絶えず下から湧きあがる上昇気流があります。この気流こそ体が重いオオワシにとって飛び立ちを助ける乗り物なのです。

眼下の諏訪湖は水深も浅く大型のコイなど魚のほか、多くのカモなど餌となる生き物がいます。越冬期間、仮の棲みかとなる山から直接餌を狙える条件、これこそがグルが居ついた最大の理由でしょう。もう一つ、オオワシが数多い北海道では、餌捕りの学習能力が乏しい若い鳥は他のワシに負けるといい、自ら生きられる越冬地を開拓するのだそうです。ここ諏訪湖周辺を拠点にしたグルの生活の一部を紹介しましょう。

平成25年(2013)年1月5日、この日は薄雲が広がる寒い日、午前中グルは氷が張り詰めた湖面に舞い降り、時おりくちばしで氷をなぞるなどして休んでいました。やがて飛びたち湖上を旋回しながら拠点の尾根筋に消えていきました。突如現れたのは午後1時13分、湖を背に山の右方向からもの凄いスピードで飛来したグルは、すでに何かを急襲する態勢で、大きな翼をすぼめ脚を出し体を左右に振って急降下。岸边近くに築かれた小島の茂みの陰に一瞬消え、すぐに飛び出たグルの脚指にはオオバンが握りしめられていました。

凄まじい瞬間を日々生き抜いていたグル。平成28年(2016)1月26日、山奥から舞い戻ったグルの嘴には、痛々しいたくさんの打ち傷が付いていました。



生きる厳しさを物語る嘴の傷
過激な日々になんがあったのか？
平成28年(2016)1月26日撮影



カワアイサを追うグル



ねらった獲物をめざしてか、林から飛び出していくグル

「グル」の年譜

和暦	年齢	御渡り	出来事	12月	1月	2月	3月	日
平成8年 1996	1		1月9日諏訪湖に初めてやって来たことが確認される、翼は褐色で尾は斑状、幼羽		1/19	1/27		9
平成9年 1997	2				1/10	1/29		20
平成10年 1998	3	○ 1/3	羽色が成鳥に向かって変化	12/31			2/28	60
平成11年 1999	4		1月4日衰弱して諏訪湖に落ちていたところを救助、2月21日諏訪市豊田の田園地帯で放鳥	1/4		2/21		49
平成12年 2000	5		1月28日再飛来を確認		1/28	2/28		32
平成13年 2001	6		3/4オオワシ観察会、降雪		1/15		3/26	71
平成14年 2002	7			12/30			2/27	60
平成15年 2003	8	○ 1/1			1/11		3/2	41
平成16年 2004	9	○ 1/3	1/31オオワシ観察会	12/30		2/19		52
平成17年 2005	10			1/4		2/26		54
平成18年 2006	11	○ 1/1	1/24オオワシの幼鳥1羽が飛来で2羽に	12/31		2/28		60
平成19年 2007	12		朝日小学生新聞（2月4日発行）のマンガにグルが登場	12/28			3/1	64
平成20年 2008	13	○ 2/2	1/17オオワシの幼鳥1羽が飛来	12/20			2/26	69
平成21年 2009	14		右翼の傷み、助けられて10年目の年 オオワシ帰展、講演会など開催	12/28			3/10	73
平成22年 2010	15		大和砂防えん堤工事グルに配慮し着手延期、高林君のおおわしグルの彫刻が「こどもたちの彫刻コンクール」で金賞受賞	12/24			2/28	67
平成23年 2011	16		飛来後左P5が換羽、修復	12/21			3/6	76
平成24年 2012	17	○ 2/6	オジロワシ飛来、中部電力が高木～上諏訪間の感電防止策実施、後に東京電力も実施	12/24			3/10	75
平成25年 2013	18	○ 1/2	オジロワシ飛来2羽	12/28			3/9	72
平成26年 2014	19		オジロワシ飛来2羽	12/29			3/4	67
平成27年 2015	20		オジロワシ飛来2羽、成人した神明小卒業生（グルと同じ年）10年ぶり観察会	12/		2/23		79
平成28年 2016	21		オジロワシ飛来2羽	12/10		2/25		78
平成29年 2017	22		オジロワシ飛来2羽	12/14		2/26		75
平成30年 2018	23	○ 2/5	1月14日もう1羽のオオワシが飛来、3月3日グル北帰行（最後）	12/12			3/3	82
平成31年 2019			飛来なし。2018年3月3日の北帰行を最後に、以後は確認されていない。					

なお表の1996年から1997年の飛来で、滞在日数が少ないのは、個人的な観察だけであり、多くの観察者の記録が当時はなかったためによるもの、実際の滞在日数ではない。

■ グルが好んだ着氷場所

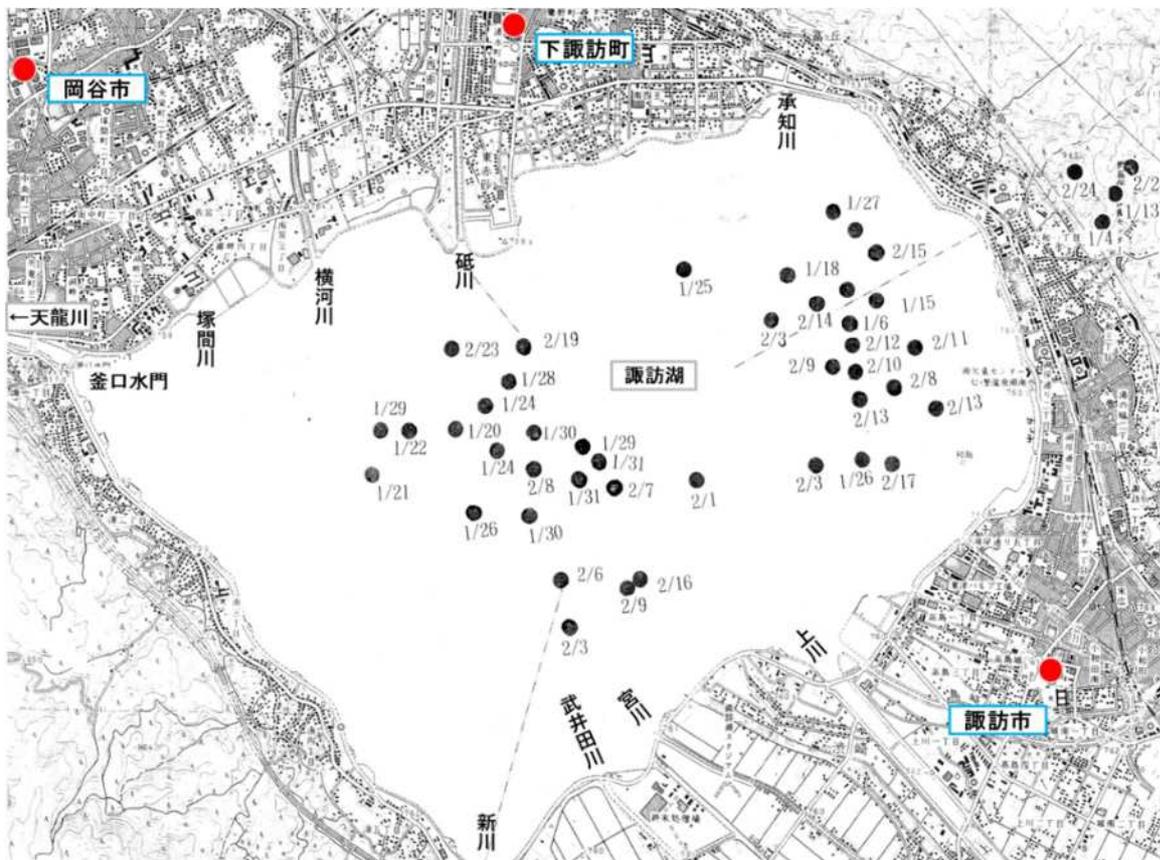
諏訪湖に飛来した「グル」が湖面に舞い降りるのは結氷後であり、氷が張らない冬は瞬間的な狩りの時を除いて湖上に降りることはありません。氷上は見通しもよく安全な休息地になるほか、時に食事場にもなります。

図で示した黒丸は全面結氷した平成16年(2004)に「グル」が降りていた場所です。自分が立っている地点と「グル」を結ぶ対岸まで線引きをし、同時刻に別の場所からも記入すれば、引いた線の交わる場所が「グル」のいる地点になります。

このシーズンは暮れの12月30日に飛来が確認され、2月23日まで61日間の滞在でした。着氷地の調べも時々で午前、午後の統一もなく2回を記録した日もありますが、このシーズンに限っては「グル」が好んだ場所はかなりはっきりしていました。傾向としては諏訪市寄りと湖心一帯に集中していたものの、岸边から300m以上の距離を保っています。それも岡谷側からはかなり離れたことが分かりました。調査中、諏訪湖では滅多に見られない珍しい光景に遭遇しました。「グル」が同じ姿勢のまま移動していたのです。高台から見たら割れた大きな氷に乗ったまま「グル」が流されていました。



「グル」とカラス



「グル」が舞い降りていた地点図 平成16年(2004)

◆オオワシ「グル」の再飛来の様子

昨年保護されたオオワシ ロシアから諏訪湖へ舞い戻る

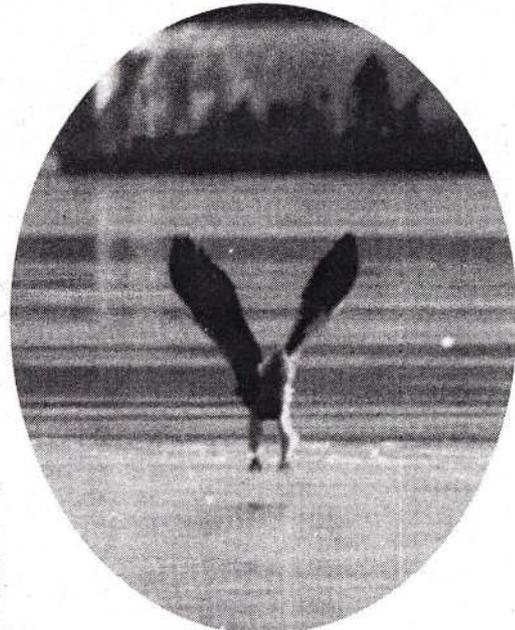
昨年一月、諏訪湖に落ち衰弱して保護され、約五十日間にわたり治療飼育して自然に返された国の天然記念物で、国内最大の猛禽

昨年一月、諏訪湖に落ち衰弱して保護され、約五十日間にわたり治療飼育して自然に返された国の天然記念物で、国内最大の猛禽

再び諏訪湖を訪れたことに、関係者は感激している。

オオワシが、一月末、諏訪湖に無事舞い戻っているのが、日本野鳥の会会員によって確認された。このワシは日本・ロシア間を往復したもので、保護飼育したオオワシが完全に自然に戻り、翌年以降に確認された例は全国的にも極めて珍しく、県内では初めての記録。

日本野鳥の会会員が確認



約1キロ沖の氷上から飛び立つオオワシ＝1月29日朝、1000メートル望遠で撮影



のワシにも認められたほか、三十一日朝には

無事に戻ってきたオオワシは、昨年一月四日、岡谷市の横河川河口に近い湖上で、衰弱

環境庁の標識も認められた。オオワシはサハリン北部などロシアで繁殖して、日本へは冬鳥としてやってくる渡り鳥、翼を広げると二・二メートルになる。諏訪湖へは、ここ数年続けて冬に同じ個体と思われるワシが一羽やってきていた。

巨大な黄色のくちばしと鋭い目が特徴のオオワシ。昨年1月の保護時に撮影

していたところを発見、保護されたもの。收容先の岡谷動物病院で、佐々木厚院長がレントゲン撮影や採血検査をした結果、黄疸（おうだん）症状や貧血が認められた。外傷、疾病など見当たらなかったため、抗生物質やビタミン剤の投与で応急処置。その後は同会諏訪支部で、県の野性傷病鳥獣救護ボランティアのもとで

「グル」が諏訪湖に再飛来を伝える市民新聞掲載記事



■ もっと知ろうグルのこと



鋭い目と大きな嘴はオオワシの特徴。諏訪湖では対岸の獲物も見逃さないほどの視力をもっている。



太い脚と鋭い爪は最強の武器。握る力も強力で捕えた獲物を絞め殺す。



オオワシ「グル」の特徴



後頭部にある白斑はグルの特徴のひとつ。



4歳になってもまだ幼鳥の羽が1枚だけ右の翼に残っていた。(写真では矢印と反対側の同じ所)

「グル」に関するQ&A

- Q1・「グル」の性別と特長は A・雌です、主な特長は嘴が雄より大きく見事です
- Q2・愛称の「グル」の由来は A・助けた直後に車の中でグルッと発したうめき声
- Q3・体重はどの位あるの A・助けた時は5.8kg、放鳥時には6.49kg
- Q4・翼を開いた長さは A・2.1m、一間(1.8m)以上もあります
- Q5・なぜ家族で来ないの A・狩りする鳥は生きるに精一杯。白鳥などは家族で飛来
- Q6・何を食べているの A・魚、水鳥の他、シカやアザラシの死体も餌にします
- Q7・諏訪湖での滞在日数は A・一定ではなかったが平均で60日くらいかな
- Q8・1日の飛行距離は A・不明、諏訪湖では50km以上飛んだ日もありました
- Q9・オオワシの寿命は A・不明です。飼育の世界記録は52歳で死亡(日本)
- Q10・夏はどこに住んでいるの A・繁殖地はロシア、その極東の1帯です
- Q11・どのくらいの日数で飛来するの A・衛星追跡などで70日以上、かなりゆっくり
- Q12・たまごはどのくらい生むの A・2個が普通で、ときに1個または3個
- Q13・幼鳥はどのくらいで大人になるの A・4歳以上(小鳥は1歳で大人になります)
- Q14・北帰行する日はどのように決めるの A・春めきを察知した本能か、詳しくは不明
- Q15・「グル」の好きな食べ物は A・「グル」に限らず海ワシ類は魚が好物です
- Q16・遠くからでも「グル」と判る特徴は A・右翼の羽が欠けています

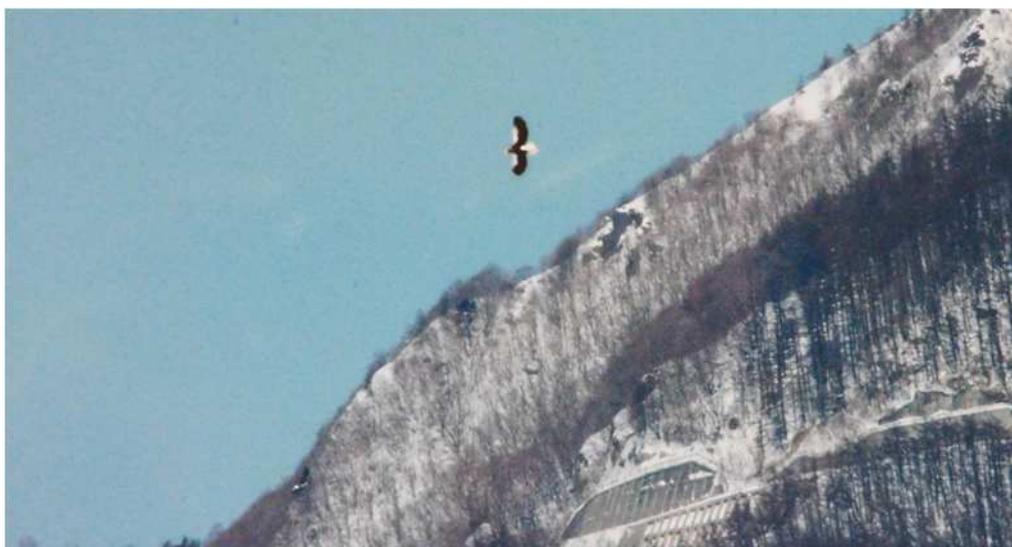
■ スケッチ帳から

グルの各部スケッチの中から一部の機能^{きのう}について紹介します。人間とは異なる働きをもつ鳥の機能の素晴らしさは、写し取ることでより理解が深まります。



グルのスケッチの一部

生態系の頂点に生きている猛禽類^{もうきんるい}は体の機能に優れ、明るさに応じて瞬時に獲物を見つけられるよう優れた眼をもち、高速で飛べる翼をもち、攻撃^{こうげき}できる鉤爪^{かぎづめ}をもっています。その爪も捕える獲物^{えもの}に合わせるように、猛禽類の種類により違った形があります。



霧ヶ峰の上空を飛翔する「グル」

岡谷市のカメラマン加藤静さんは、「グル」を撮影するため何年もの間、^{げんかん}厳寒の湖岸に立ち連日シャッターを押しながら数百日に及ぶ「グル」の行動や飛行図を残しました。そのメモの一部を紹介します。



「グル」の記録を残したメモ

□平成 17 年(2005)2 月 1 日午前 10 時

流氷の先端部が初島より 600mから 700 m。「グル」は流氷で約 2 時間移動せず。午後 0 時 10 分に高浜方面へ低く直線飛行し、波間よりコイを足で引き揚げ氷上にもどる。30 cmほどのコイを約 20 分間できれいに食べたあと、0 時 40 分に飛び立ち山に消えた。

□平成 17 年(2005)2 月 3 日午前 11 時 30 分

高木上空に^{せんかい}旋回しつつ出現、途中で見失ったが 10 分後に約 1 km 沖の氷上に下りていた。午後 1 時に高浜方向に飛び旋回しながら消える。午後 3 時すぎ高木上空に現れた。高度は 600m 以上で飛行していたが、やがて急降下したものの魚を^と捕った^{けはい}気配はなし。



獲物を捕らえた「グル」



雪山を背にして飛翔する「グル」

□平成 17 年(2005)2 月 26 日午後 2 時 30 分

前日午後 4 時まで観察した「グル」が今日は全く出現せず北帰行した可能性がある。日本野鳥の会諏訪支部の 26 日に塩尻市の県林業センター周辺で実施した探鳥会で「グル」と思われるオオワシが上空で記録されたと知る。

□平成 18 年(2006)1 月 23 日午後 2 時

ほぼ湖心こしんに「グル」と幼鳥と見られるワシを見る。その後このワシはオジロワシらしいことがわかった。観察中には「グル」とオジロワシが近くに並んだ。

□平成 20 年(2008)1 月 25 日午前 10 時

結氷部けっぴょうぶに「グル」がいたが飛び立ち上川方向で旋回せんかいしていたが、八ヶ岳の方で見失った。11 時ころカラスが「グル」の周辺で群むれていたとの情報あり。結氷 60% くらい。釜口水門の 1 km 位から 500m ほど水面が広がっている。

□平成 21 年(2009)1 月 20 日午後 3 時

湖の氷も半分になり岡谷市の湊側は大きく水面が開けた。すわっこランドと赤砂埼先あかさざきの中間に「グル」がすでに 3 時間もたたずんでいる。捕とらえてきたコイも内蔵ないぞうだけ食べ本体はカラスたちに任まかせていた。



諏訪湖の氷上にたたずむ「グル」

■ レンズが捉えた間近なグル

冬の諏訪湖畔でオオワシ「グル」が飛来すると、多くのカメラマンが岸边に立ち並び市民も加わってしばしグル談義。そんな冬の風物詩が十数年も続いていました。



獲物を見つけたのか、鋭く羽ばたいて飛び去る「グル」



力強く飛び立つ「グル」、右足にリングが見えます。
「KANKYOSHO TOKYO JAPAN・150-0368」と刻印されています



右の翼の切れは「グル」の特徴の一つ、頭上を翔ける姿には歓声があがる



初島の鳥居に止まるグル



紺碧の空に美しい舞い姿



寒風のなかグルの飛行を撮る人たち

高性能なカメラでグルの飛ぶ姿を追うグルファン。

野鳥のなかでもオオワシの存在感は格別と県外者も訪れていました。ある日、湖畔にプロの生態写真家が来て、撮影法や撮影上のマナーについて“臨時講習”「まずは自然に優しくなることが第一です」と語っていました。

■ グルが見据える視界の先は

私たちが地上から見上げたグル。湖上でグングンと高度を上げ、小さくなる姿を追いながら、一方で「彼らが上空から見下ろす光景はどんなであろう」と思ったりしませんか！ 渡りの際、彼らは「地球の皺^{しわ}」を見つめながら大陸まで移動してゆくのです。



彼らが飛ぶ視界の先にどんな光景がまっているのか。壮大な光景を想像してみませんか。グルになって空想の世界をいますぐ飛んでみましょう。大いなる景観とともに、人間の日常の姿も見えてきそうです。



ほうしゃれいきやく
放射冷却で冷えた無風での朝、雲海が諏訪湖にふたをした光景が出現します。こんな美しい光景もグルは平静^{へいせい}さを保ったまま飛んでいたことでしょう。

■ 街の上をゆうゆうと飛翔^{ひしゅう}する「グル」

オオワシ「グル」の生息環境が、他の越冬地の水辺と違う点をあえて挙げれば、諏訪湖の場合は湖周が大きく開発されている点でしょう。とくに温泉街の諏訪市は観光地であり賑わいがあります。

そんな環境のなかグルは長年の越冬生活で獲得した学習効果を発揮し、したたかに生き延びていたことでしょう。

より人に近い場所で生活していた貴重な生き物。今後、第二のグルのためにも配慮の心がけは大切にしたいものです。



夕月のもと、気持ち良さそうに飛ぶグル



←空気が澄む冬、ひときわ美しい富士山を背景にグルが横切る瞬間。下諏訪の高浜方面からとらえたラッキーな一枚です。



高島城をバックに魚を捕まえ氷上を飛ぶグル



立石からは街中にグルが

■ 「グル」は食物連鎖の頂点

諏訪湖周辺では食物連鎖の頂点に立つオオワシは、ほかの生き物に対して常に緊張感を与えています。「グル」が攻撃態勢に入ると、カモたちは一斉に警戒態勢をとり身を守ります。下の写真は「グル」が諏訪湖で実際に狩りをし、餌としていた動物たちです。

湖の豊かさとは、多くの命が生まれ共に生活し、そして食物連鎖により物質が循環されること。生き物同士の緊張は生きることにとっても好ましいことです。



カワアイサ



ヒドリガモ



オオバン



動物の命で生きつなぐオオワシ



フナ



ドバト



ブラックバス



ニゴイ



コイ

この写真で示したようにオオワシは多くの生き物を捕えて生きていますが、海ワシだけに諏訪湖周辺にいても、主な餌は魚に頼っていました。

■ 湖面の獲物を捕る瞬間

平成 25 年 (2013) 2 月 7 日 9 時 54 分～56 分



(1) 湖面のカモを捕らえました



(2) 落とさないよう慎重に



(3) しっかりと自慢の爪^{つめ}でつかんでいます



(4) 氷の上で食べたいな～



(5) 氷の上でゆっくり食事です



でも、いつの間にか周りにカラスたちが

■ 獲物を捕る瞬間

平成 28 年 (2016) 1 月 16 日 13 時 57 分～58 分



(1) 湖上^{こじょう}のカワアイサをめがけて急降下^{きゅうこうか}



(2) あれ！一回目は失敗^{しっばい}でした



(3) 再度挑戦^{さいどちょうせん}です



(4) 今度は捕ま^{つか}えられたかな？



(5) みごと成功しました

平成 30 年 (2018) 1 月 31 日 14 時 33 分～15 時 14 分



(1) 氷の下にコイがいるぞ！
カラスが見物にやってきました



(2) 薄氷を割るのはかんたん、かんたん！
首を突っ込んで カラスが 2 羽に



(3) 少し出てきたぞ

氷の下に死んだコイを見つけると自慢のくちばしで氷を割って取り上げます。



(4) 大きなコイをゲット



(5) どうだ、欲しいだろ

■ 「グル」の食事スナップ



おいしそうだが、どこまで伸びるかな

体を清潔せいけつに保つために、鳥たちは様々な動作どうさをします。よく知られているのは羽をきれいにするための水浴すなあや砂浴びです。汚れを落とすだけでなく、寄生した虫なども払い落しますが、これ以外に羽の手入れにアリを浴びる蟻浴ぎよくや煙突から出る煙に飛び込む煙浴えんよくも知られていません。

右の写真は、食事後に氷面にくちばし 嘴をこすりつけ汚れを落としてしている「グル」。

ほかには足指そうじで掃除をしたり木肌きはだにこすり付けて嘴をきれいにし、細菌さいきんの増殖ぞうしょくを防いでいます。

左は珍しい光景です。動物の腸はらわたが氷に挟まっていたのか、立つと90cmもあるグルがその身を伸ばし切って食べています。多分トビが先に見つけた餌でしょう。

下の写真は鉄塔のてっぺんで何やら引っ張っていますが、こちらの食事は終わりに近いようです。



食べ残りは骨ほねと皮ばかり



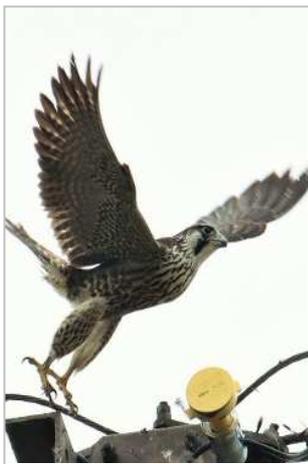
首を左右に振って氷面で嘴をぬぐう「グル」

■ 諏訪湖の猛禽類たち、グルのライバルも

諏訪湖には象徴的なオオワシ以外にもタカ科やハヤブサ科の猛禽が出現します。うち水辺に依存するのはオオワシとオジロワシ。よく見るトビも水辺に多い鳥です。オオワシ「グル」はこれらと競い合いながら諏訪の冬を過ごしていました。



トビ



ハヤブサ



チョウゲンボウ

諏訪湖ではここにあげた以外の猛禽類も確認されるなど食物連鎖の頂点に生きる鳥の多彩さに驚かされます。

オオワシとオジロワシ以外の写真の鳥は四季を通して見られる留鳥です。そして水辺に多いトビ以外の鳥は、湖周や平地、山すそなどで鳥や動物を求めて飛来する猛禽たちです。

オオワシ「グル」が競い合ったのはオジロワシやトビなど主に魚を狩る猛禽で、餌の確保が厳しかった日など小型のフナを奪い合い、獲得したグルが空中で滑空しながら食べていました。このほかグルが下諏訪町の高木湖畔でハヤブサが捕えたオオバンを奪い取るのを目撃されました。諏訪湖で餌を捕れない日、グルは山沿いや山頂の上空を飛んで餌を探していましたが、山中に降り餌を捕えた現場は一度も確認されていません。銃猟で死んだ餌などに頼らなかったのは幸いでした。



オジロワシ成鳥（左）とオオワシ「グル」



クマタカ



ノスリ



オジロワシ幼鳥

■ 「グル」を取り巻く鳥との^{そうだつせん}争奪戦



またたく間に「グル」の周囲に集まった厄介者

捕えた餌も食べ終わるまでは自分のものではありません。鳥たちが競って食べ飲み込むのはそのためです。鳥の中には餌を飲み込んだ鳥を追いかけて、吐き出した餌を空中で奪い取る鳥さえいます。

右の写真は魚を捕えた「グル」につきまとうトビ、しつこい相手に、「グル」が^{くちばし}嘴を開けて追い散らしています。

諏訪湖にいる鳥で動物食の鳥は^{もうきんるい}猛禽類以外にサギ類、雑食性のカラス、ほかに小鳥でも動物質に頼って生きている野鳥は多くいます。

左の写真のように、オオワシ「グル」が捕えた餌をかすめ取ろうとカラスやトビ、アオサギなどが集まり、その威圧と喧騒に「グル」があっさり餌を放り出すこともあります。大型の猛禽といえども平穏な時間などありません。



トビを追い払う「グル」

ワシ同志の争い、それは湖から得られる餌の量にも関連します



オジロワシ（左）を^{ついでき}追撃する「グル」

諏訪湖では 1984 年にオオワシ 3 羽が飛来し、その後もオオワシとオジロワシが同時に観察された冬もあります。しかしワシ類に詳しい専門家は狭い諏訪湖にワシが飛来することに驚いています。

複数のワシが飛来した場合、厳しい冬を生き抜くための争いが決まって繰り広げられ、どちらか一方が追い出される場合があります。それは湖から得られる餌の量にも多分に関係しているといえます。

■ ありえない出来事

自然界ではときに想定外の場面に遭遇します。ハヤブサやイノシシとのニア・ミス。たがい同志が何を考え行動していたのでしょうか。

イノシシ

平成 18 年 (2006) 1 月 11 日の正午過ぎ、岡谷市の横河川の河口方面から氷上に現れたのは、なんとイノシシ君。

白昼の氷上をおっかなびっくりで諏訪方面へ。余り足元ばかり見ていたので「グル」に気付いていたのかどうか。



一方「グル」は万が一のことを考えいつでも飛び立てる態勢でいるように見えます。

このイノシシ君、はるか^{おきあ}沖合の氷上からこつ然と見えなくなったそうです。無事であってくれたなら良いのですが。



ハヤブサ

平成 29 年 (2017) 1 月 7 日のこと、下諏訪高木の上空を飛んでいた「グル」の後方からハヤブサが急接近、一瞬背に乗ったかにも見えます。

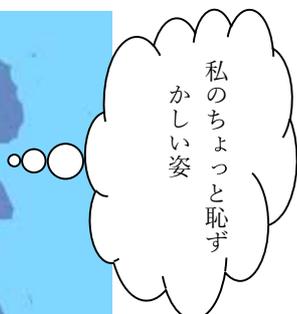


この異常な接近はオオワシを上回るスピードで飛べるハヤブサならではの大胆さがうかがえます。



■ グル、こんな面白い場面

精悍^{せいかん}なオオワシ、グル。けれども日々の行動のなかでは滑稽^{こっけい}な姿も見せてくれました。そんな楽しい姿を紹介します。



さあ一助走(いちすけぞう)していくぜい!



羽毛(うま)が鼻(はな)に、これが本当(ほんとう)の鼻毛(はなげ)



おととと、私が早い(はやい)ね



神聖(しんせい)な御神渡(みかみわた)りの上で、ちょっと失敬(しんけい)



こんな小さな餌(え)も、それよりカラス(からす)をつかめ



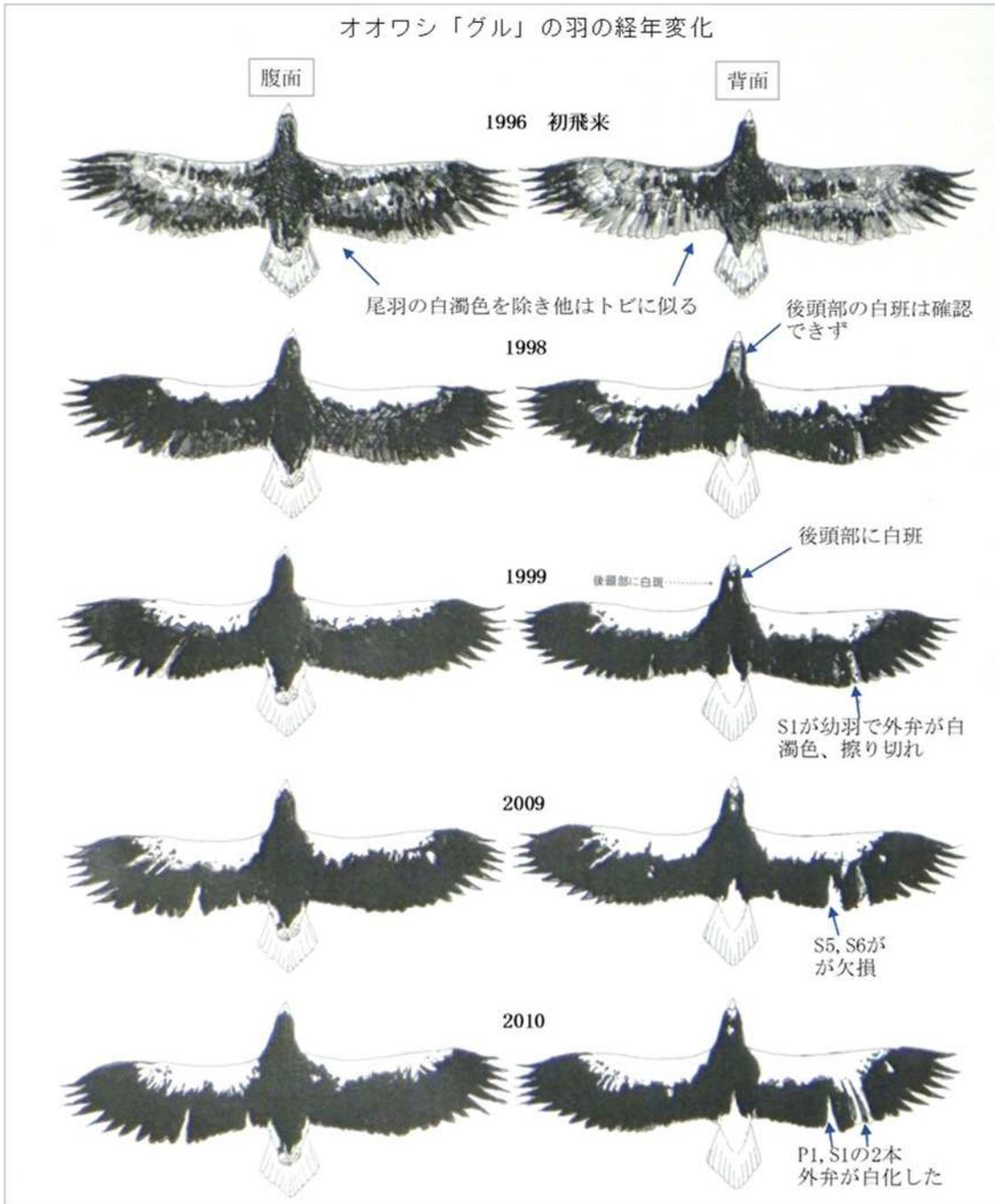
着氷(つきひょう)はサツと滑(すべ)って、はいピッタリ!



グル「助けてー」、カラス「自分で上(あ)がれ」

羽の経年変化 けいねんへんか

小鳥の多くは1年を過ぎると親鳥とほぼ変わらない羽色になります。けれども大型の鳥は数年かけて成鳥の姿に衣替ころもがえをします。オオワシの場合も同様で、「グル」は4歳で保護されましたが、専門家の調べで右の翼で次列風切り羽と呼ばれる1本の羽が幼鳥の時のままの羽でした。その後も図にあるように変化し、外弁部分の白化などがみとめられました。



図、林正敏

オオワシは完全な成鳥の羽になるのは6～7年かかるといいます。他に目の虹彩こうさい(人間の白目の部分)も成鳥に向け濁にごった黄色から明るい黄色に変化をします。

■ オオワシを捕獲した時代

現在の狩猟制度が出来あがる以前の狩猟はどんなだったでしょう。江戸末期から明治初期にかけて急速に近代的な自由国家に移りかわるなか、それまでの厳しい禁猟政策きんりょうせいさくにも影響があらわれました。鳥や獣けものへの守り事が崩れ、殺生禁断かいらつの戒律がゆるんで、貴重な鳥がことごとく狩猟の対象になりました。

大正 13 年（1924）に当時の農商務省がつくった狩猟鳥類掛図が今も残され、その内容からも分かります。この掛図は、縦 1 m、横 65 cmほどの厚紙に石版で印刷されています。当時、生態画家の第一人者、小林重三の筆によるものです。5 枚 1 組になっていて主な狩猟鳥 120 種類が描かれています。そこに描かれている鳥類は次ページで示したように、オオワシ、オジロワシ、イヌワシ、クマタカなど大型の猛禽類から、アホウドリ、クロアシアホウドリなど大型海鳥。ほかの掛図にはルリカケス、カラスバト、タゲリ、タマシギなども描かれ、いずれの鳥も狩猟ができました。このように当時は無秩序な乱獲によって、国内の貴重な鳥たちは急激に少なくなりました。

掛図中央にはオオワシが見事に描かれ、その下段には現在絶滅のふちで生きているアホウドリの姿も見られます。そのころのオオワシ狩りは鉄砲で撃ち落していましたが、食用としての肉利用は少なく、主に高級な矢羽根として売買され、高値で売れたと言います。

今日、各地の博物館や学校などに保存されているオオワシやオジロワシなどはく製の多くは、その頃に捕獲されたものと思われる。

昭和	県名・羽数	
4	石川県	5
5	北海道	2
	長崎県	1
9	福井県	4
10	福井県	2
11	北海道	3
13	北海道	4
21	富山県	2
29	山口県	2
計	6 道県	25



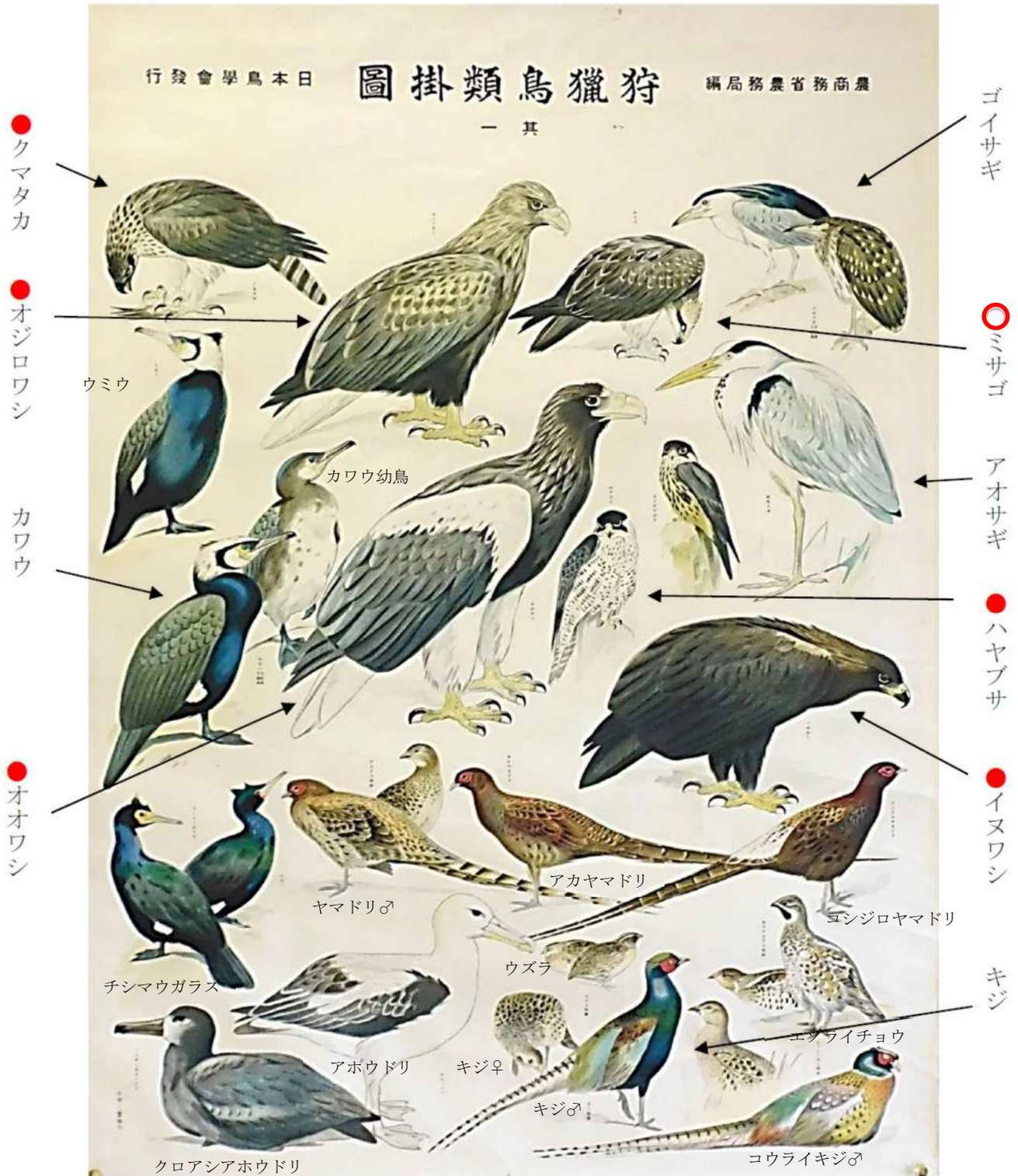
狩猟鳥類掛図（カモ科）の一部
ガンやハクチョウなどの大型の水鳥も狩りの対象になっていました。

上の表は昭和以降になって駆除したワシの記録で林野庁の資料です。多くが北海道と北陸で捕獲されています。

昭和 29 年（1954）に山口県で駆除した 2 羽の種類はイヌワシで、通学の児童おそに襲い掛かってくるため駆除したそうです。それ以外のワシの種類や駆除理由は明記されていません。

■ 大正 13 年(1924) に作られた狩猟鳥類掛図

これは今から約 100 年前につくられた狩猟ができる鳥の掛図です。このなかで当時諏訪湖の周辺で見られ、今も確認できる鳥を拾いだしてみました。●印は現在絶滅危ぐ種、○印は準絶滅危ぐ種に指定された鳥たちです。



大正 13 年(1924) 農商務省農務局編狩猟鳥類掛図 日本鳥学会発行 其の 1

オオワシの死因トップは鉛中毒

オオワシは世界で4,600羽から5,100羽が生息し、そのうち約1,500羽が北海道へ越冬にやってきます。つまり、地球上にいる多くのオオワシが日本に飛来しているのです。オオワシ、オジロワシなど、海ワシ類は主に魚に頼って生活してきましたが、北海道では1990年代になって水辺から離れた内陸に移動するオオワシが頻繁に見られるようになりました。その移動先の原野で見つけたのが狩猟による残渣や駆除で横たわったエゾシカの死体でした。オオワシがこれらを食べる際は、弾の入った傷口から切り裂き食べることが多いとされ、そのとき誤って肉片と一緒に鉛弾を飲みこんでしまうのです。鉛によって中毒を引き起こしたワシたちは激しい貧血と神経症状からくる運動機能の低下により衰弱、やがて死に至ります。

平成9年(1997)に北海道で死んで見つかった26羽のうち18羽が鉛中毒死と断定され、翌10年度(1998)も同じく回収された33羽のうち26羽が鉛中毒によるものでした。このまま鉛製の銃弾でエゾシカ猟を続けた場合、オオワシやオジロワシの生存に深刻な影響を与えることがわかりました。このため北海道では平成11年

(1999)の狩猟期に、狩猟者の皆さんへエゾシカ猟をする際に鉛製のライフル弾から毒性の低い弾に切り替える鉛弾使用の自粛を呼びかけました。その結果、平成11年の飛来期に確認されたワシ類の鉛中毒数は14羽で、平成10年の飛来期と比べておよそ半分になりました。しかしその後も鉛中毒による事故が続いています。

◆鉛中毒問題の解決に向けて

- 平成12年度(2000) エゾシカ猟における鉛ライフル弾の使用規制(鳥類保護法・北海道告示)
- 平成13年度(2001) 鉛散弾の使用規制 (〃)
- 平成15年度(2003) 狩猟によって発生する獲物の放棄の禁止 (〃)
- 平成16年度(2004) ヒグマなどすべての大型獣の狩猟での鉛ライフル弾、鉛散弾の使用禁止 (〃)
- 平成26年度(2014) エゾシカ猟時の特定鉛弾所持の禁止 (〃)
- 令和3年度(2021) 全国で段階的に鉛弾使用を禁止し2030年度までに鉛弾使用は禁止し鉛中毒による野鳥の死亡ゼロをめざす。(環境省)



鉛中毒で死亡したオオワシ
釧路自然環境事務所 HP より

◆諏訪湖周辺の鳥・鉛中毒は

諏訪地方で鉛中毒によって死亡が確認されている鳥は、現在までは諏訪湖に飛来するハクチョウやカモ類などカモ科の水鳥に限られています。水鳥以外の被害は調査がされていないため実態がつかめられていません。

ハクチョウの鉛中毒例

諏訪湖に飛来するコハクチョウが衰弱し諏訪湖白鳥の会会員によって保護され、これらを治療した豊科町のどうぶつの病院、望月明義院長が調査した鉛中毒の記録があります。

それによると平成2年（1990）から令和元年（2019）までに諏訪湖で10羽のコハクチョウが保護され、いずれも鉛中毒で、うち4羽が死亡、6羽は回復し放鳥されました。原因は釣りに使う鉛製の錘を飲みこんだためです。ハクチョウなどは食べた植物の繊維を砕く砂嚢の中に、わざと小石を飲み込みます。その際に湖底に沈んでいた錘を拾ってしまうのです。私たちが気付かないところで野生の命が脅かされています。

クマタカがシカを食べていた

北海道ではオオワシ、オジロワシに加えクマタカがシカの死体に飛来するなど、大型の猛禽類全体に鉛中毒の広がり心配されています。平成24年（2012）の春先、諏訪市で山中に建つ高圧線鉄塔でクマタカ2羽が相次ぎ感電死する事故が発生。うち1羽の消化器官から大量のシカのペリット（毛玉）が出てきました。猛禽類がシカを食べていた事例としては長野県内で初めてと思われる。増えすぎたシカの駆除によるイヌワシ、クマタカへの影響が心配されます。



鉛中毒で衰弱したコハクチョウ
(2013年下諏訪町の赤砂埜で)



消化器官から出てきた2個の錘



感電死した大きなクマタカ



体内から出てきたシカの毛玉

「10年の軌跡、オオワシ回帰展」を開く

諏訪湖で衰弱していたオオワシが助けられた平成11年（1999）から10年が経過したことから「10年の軌跡、オオワシ回帰展」が平成21年に下記により開催されました。

期 間 1月24日から2月8日まで

場 所 諏訪湖博物館・赤彦記念館 特別展示室

時 間 午前9時～午後5時（入館は4時30分まで）

講演会 2月1日 介護に携わった二人による講演会を実施

講師 日本野鳥の会諏訪支部長 林正敏 岡谷動物病院 院長 佐々木厚先生



「10年の軌跡・オオワシ回帰展」の案内状

「10年の軌跡・オオワシ回帰展」案内状

期 間；平成21年（2009）1/24～2/8

共 催；日本野鳥の会諏訪支部、

諏訪湖博物館・赤彦記念館

後 援；岡谷エコロータリークラブ



オオワシ「グル」の写真展の様子



説明に耳を傾ける参加者

特別講演会 平成21年（2009）2月1日

【演題】オオワシ介護奮闘記

講師 日本野鳥の会諏訪支部長 林正敏

【演題】オオワシの動物病院における診断と治療

講師 岡谷動物病院 院長 佐々木厚先生

衰弱したオオワシの医療・介護にたずさわった二人の講演会は興味深い内容とあって、会場いっぱいの聴講者。

講演後も参加者からの質問があいつぎました。

写真展、見学者のひと言・・・

中村恒也さん（故人）

（元セイコーエプソン社長）

「ワシの保護は意義深い、記録を残そうよ」

徳山昌守さん

（WBOスーパーフライ級元世界チャンピオン）

「凄い、力をもらった！」

青木健一さん（故人）

（元下諏訪町町長）

「ワシと諏訪湖の大切さを知る機会となった、多くの人に見てもらいたいね」

■ オオワシに配慮、砂防えん堤工事が一時休止 平成22年(2010)

諏訪建設事務所が発注した、大和沢流域の土石流を抑える砂防えん堤工事については、平成21年(2010)12月18日にスワテック建設(株)と契約し、工事にかかる準備を進め、近く現場内の樹木を伐採する予定をたてていました。しかし、11年前に諏訪湖で保護したオオワシがその冬も越冬のため飛来し、付近の林を利用していただけから、工事による影響が心配されるとして、日本野鳥の会諏訪支部長であり、オオワシを治療し放鳥した林正敏さんの指導を受け、工事業者の理解と協力を得て、工事のための樹木の伐採をオオワシがロシアに戻る3月上旬頃まで休止することとしました。



一帯の林を好んで利用したグル

大和沢砂防えん堤は、霧ヶ峰西南の山麓部を源とし、諏訪湖へと流入する土石流危険溪流です。下流部には災害弱者施設である聖母の会老人ホーム「聖母寮」、諏訪市デパートビル「憩いの家」等が立地し、その他にも民家、工場、事務所、商店、飲食店等保全対象人家153戸が密集しています。さらに、重要交通幹線であるJR中央本線及び国道20号も通過しており、ひとたび土石流が発生した場合、その被害は甚大です。よって、砂防えん堤を整備し、土石流の抑止及び溪流浸食の防止を図る計画です。

平成22年1月15日

諏訪湖のオオワシ「グル」に配慮し 大和沢えん堤工事を一時休止します

大和沢流域の土石流を抑えるえん堤工事については、平成21年12月18日にスワテック建設(株)と契約し、工事にかかる準備を進め、近く現場内の樹木を伐採する予定をたてていました。11年前に諏訪湖で保護したオオワシがその冬も越冬のため飛来し、付近の林を利用していただけから、工事による影響が心配されるとして、日本野鳥の会諏訪支部長であり、11年前に治療し放鳥した林正敏さんの指導を受け、工事業者の理解と協力を得て、工事のための樹木の伐採をオオワシがロシアに戻る3月上旬頃まで休止することとしました。

冬になると、諏訪湖には、遠くロシアから一帯の渡来オオワシ(国の天然記念物)が飛来します。このオオワシは、平成11年1月4日に諏訪湖上で繁殖していたところを保護されました。日本野鳥の会諏訪支部長で東京農業大学ポロニアの林正敏さんが約30回にわたって継続的な治療と心づまる飼育により、光気を回復し、ふたたび諏訪湖上に飛来されました。

オオワシが来州を飛来することは珍しいと言われていますが、このオオワシ「グル」は、この時の産卵を認めます。平成21年は来季から繁殖活動に復帰し、今年飛来したので11年連続となりました。保護された時にグルと鳴いたことから「グル」と呼ばれています。

オオワシ Steller's Sea Eagle

【特徴】
日本でもっとも大型の鳥類では最大の雄の体長はオス 86cm、メス 76cm、翼長 210cm-230cm、体重 9kg-19kg。雌は大型で雄より、体長はメス 76cm、翼長 210cm、体重 9kg-12kg。雄は大型で雄より、体長はメス 76cm、翼長 210cm、体重 9kg-12kg。雄は大型で雄より、体長はメス 76cm、翼長 210cm、体重 9kg-12kg。

【生息地】
海や川、湖沼などに生息する。渡り鳥の途中や越冬地では小規模な群れを形成して生活する事が多い。かつては越冬地では本産の鳥と見られ、劣性は動物食で、主に魚類を食べるが鳥類、小型哺乳類の稚鳥、動物の死骸なども食べる。

【分布】
東部にロシア東部のカムチャツカ半島、サハリンなどで繁殖し、冬期になると北半球の他の越冬地へ南下する。日本では北海道中央部北部に飛来する。日本では北海道中央部北部に飛来する。日本では北海道中央部北部に飛来する。

【人間との関係】
農地に生息する農地の被害や動物の減少、狩猟された動物の死骸による幼鳥などにより生息数は減少している。日本では1999年、国の天然記念物。1999年に種の保存法の施行により国内産のオオワシが繁殖地に指定されている。

国家一等重要鳥類(希少種) 絶滅危惧種(II)

大和沢砂防えん堤

保全対象人家 153戸
公共施設等
1. 聖母老人ホーム聖母寮
2. デパートビル「憩いの家」
3. 諏訪市児童遊園地
4. JR東電 諏訪20号
JR中央本線

【工事概要】
- 砂防えん堤 1基
高さ 12.5m
堤頂長 1164.5m
- 工事用途 11741m²
- 新築延長 2.7m
工 期 平成21年12月18日
～平成22年12月18日
請負業者 スワテック建設(株)
現場代理人 沢野浩幸
監督技師 林 亮

【工事停止】
大和沢の流域に砂防えん堤建設予定
大和沢は、霧ヶ峰西南の山麓部を源とし、諏訪湖へと流入する土石流危険溪流である。下流部には災害弱者施設である聖母の会老人ホーム聖母寮、諏訪市デパートビル「憩いの家」等が立地し、その他にも民家、工場、事務所、商店、飲食店等保全対象人家153戸が密集している。さらに、重要交通幹線であるJR中央本線及び国道20号も通過しており、ひとたび土石流が発生した場合、その被害は甚大である。よって、砂防えん堤を整備し、土石流の抑止及び溪流浸食の防止を図り、発生した災害に備えるものである。

諏訪市大和沢のえん堤工事 オオワシに配慮し延期

北帰行まで

諏訪建設事務所
TEL: 026-222-1111
FAX: 026-222-1112
〒368-8501 諏訪市大和沢1-1-1

大和沢砂防えん堤工事延期を紹介したパネル 諏訪建設事務所作成

大和沢砂防えん堤工事の概要

【工事概要】

- ・ 砂防えん堤 1基
高さ H= 12.5m
堤頂長 L= 64.5m
- ・ 工事用道路 L= 141m
- ・ 前庭保護工 一式
- ・ 工期 平成21年12月18日
～平成22年10月13日
- ・ 請負業者
スワテック建設(株)
現場代理人 久保田 吉幸
監理技術者 柿沢 充

その後の経過

「グル」の北帰行を確認し、工事再開は3月18日に行いました。

この工事では、工期を短縮するための努力などが認められ、長野県優良技術者表彰を受けました。

受賞理由

- ・ 残存化粧型枠を使用し工期短縮を図りました。
- ・ 工期の短縮を図るため、早強コンクリートを採用しました。
- ・ 施工現場にWebカメラを設置、常時監視できる体制にし、異常気象などに備えました。

オオワシグルに配慮したこと

- ・ 今回使用した残存化粧型枠は、茶系統の着色型枠を採用しました。
- ・ コンクリートえん堤の天端も自然に溶け込むよう茶系統で着色しました。
- ・ 重機は、低騒音低振動を使用し、現場でのクレーンは出来るだけブームを下げて使用しました。



長野日報掲載記事 平成22年(2010)1月15日



砂防えん堤の施工にあたり、周辺と同系統の着色残存型枠を使用し、生息環境との調和を図りました。

■ 電力 2 社が野鳥の感電防止に動く

オオワシやイヌワシ、クマタカなど大型の猛禽類をおそう動物は自然界にはいません。猛禽類にとって真の脅威きょういは人間かもしれません。山の上に建つ高圧線の鉄塔は猛禽類にとって休息地えものであり、獲物を探す場所。だがそこは生死と隣り合わせ。危険な箇所えものにふれて感電死する鳥がいるのです。



危険な箇所の真上にいる「グル」



危険な角の近くにいる「グル」



感電死した 2 羽目のクマタカ



焼け焦げた翼

平成 24 年（2012）3 月 24 日のこと、諏訪市の山中を走る中部電力の高圧線で一羽の大きな鳥が感電死しました。その鳥は絶滅危惧 1B 類ぜつめつきぐに指定された貴重なクマタカでした。タカといっても山に住むワシの仲間です。事故は普段は触れることのない山中に建っている鉄塔のアークホーンと呼ばれる角に触れたためで、77,000 ボルトの高圧電流により即死したものです、さらに 24 日後の 4 月 17 日、同じ鉄塔で別のクマタカが感電死したのです。

この事故を受け日本野鳥の会諏訪支部ではオオワシ「グル」の保護もふくめ、中部電力と諏訪の山中を走る東京電力に事故の防止策を働きかけました。その結果、中部電力は 14 基の鉄塔を、また東京電力では 17 基の鉄塔で事故の防止策が施され、特に事故を受けやすい大型の猛禽類にとって安全で優しい施設となりました。



鉄塔を平地から調べる中電職員



大型猛禽類が止まらない装置を開発した東京電力

■ 文化に一役買ったグル

長いこと諏訪湖上に美しい姿を見せてくれたグル。命の躍動と懸命に生きる日々の行動に感動した人は多く、与えてくれた強烈な印象は文学面や美術関連だけでなく、情報誌など多方面ですばらしい影響を与えました。

作家の梨木香歩さんは月刊誌「考える人」（新潮社）に「渡りの先の大地」としてオオワシ「グル」にもふれて連載、その後に出したエッセイ「渡りの足跡」（新潮社）は、鳥の渡りの先の大地にはいったい何があるのだろう・・・と、北海道知床、諏訪湖、カムチャッカへと足をむけた渡り鳥の旅物語です。この作品は第 62 回読売文学賞を受賞しました。

また下諏訪町の島木赤彦研究会が全国に作品を募集した第 19 回島木赤彦童謡コンクールでは、千葉県柏市の竹村恵子さんの作品「大わしとおじさん」が一般の部で優秀賞に選ばれました。

平成 23 年（2011）には J R 東日本が新幹線の車内誌「トランヴェール」に「信州 鳥の遠足」を特集し、オオワシ「グル」が大きな話題として登場、オオワシの生態と、「グル」に心を寄せる諏訪の人々を紹介しています。

著述業の妹背みづきさんは地域文学誌「続、諏訪の物語」にオオワシ救助に関わった人間模様と「グル」の行動を書いた「諏訪湖オオワシ伝 - 孤高の鷲グル -」を掲載。このほか短歌、俳句、絵画。塩嶺小鳥バスのピンバッジなど、1羽のオオワシが文化にも貢献しました。



小鳥バス乗車記念バッジ



単行本、文学誌、情報誌など、グルにふれた内容が多く掲載されました



新幹線の車内誌「トランヴェール」

■ 神明^{しんめい}小学校児童が 10 年目の奇跡

岡谷神明小学校を平成 18 年（2006）に卒業した児童のあるクラスが、4 年生の総合学習の時間にオオワシ「グル」をとおして諏訪湖の自然について学びました。一年間の学習を担当した日本野鳥の会の林正敏さんが小鳥の森・塩嶺閣を主会場に、下諏訪町の諏訪湖博物館にも出向き館内に展示されたオオワシのはく製（このはく製の経過は p11～12 を参照）を前にその生態や「グル」について語り、湖岸では観察会も行いました。



お腹がすいた「グル」



博物館の中でオオワシの生態について学ぶ児童



満腹の「グル」は外見からも胃袋のふくれが確かめられる



諏訪湖をバックに「グル」が飛来するのを待つ児童たち



オオワシを学習した成果の数々

十歳の児童、二十歳^{はたち}の門出に奇跡

この学習でグルが現在 10 歳だと知った一人の児童が「私たちもいま 10 歳、もう 10 年たっても『グル』がいたら成人式で集まって会いにいきたい」とつぶやきました。野生に生きる鳥のこと、誰もが心の中では「そんなことって、絶対ないよね」といった顔をしていました。

そして10年の歳月が流れ、当時のクラスメートはそれぞれの道に進んでいましたが、「グル」は遥かロシアからずっと諏訪湖に飛来していたのです。夢のようなこの出来事に仲間は大喜び。すでに他校に赴任していた当時の担任で体験学習を熱心に取り入れていた名取砂由美先生の呼びかけで、「グル」の観察会が実現しました。

平成27年(2015)1月10日、やってきた同級生は男女の有志15人。諏訪湖博物館を出て諏訪市の湖畔に移動して間もなくのこと。突如、遠くの山の上に現れた小さな鳥影。みるみる大きくなり一行の頭上を力強くはばたき湖上に遠ざかっていきました。まさに二十歳の門出を祝福するような光景で、この奇跡的な出会いに全員歓声をあげていました。

成人者の中には教師をめざし教育大で学ぶ学生数人もいて、彼らは「自分たちが学んだ貴重な体験は教師をめざすものにとって得がたい時間、今後に生かしていきたい」と感想を述べていました。

同級生、当時のコメント

増澤直也さん

「グルとは小学生以来で感慨深い。教えてもらったグルの存在が糧になっている。教育的な視点でこうした感動を伝えられるような教師になりたい」

太田千晶さん

「こんなに大勢が集まるとは思わなかったので嬉しい驚き。総合学習で故郷の自然の良さを勉強できたが、当時はグルの姿を見ることが出来なかった。二十歳の節目に皆で見られて嬉しい」



二十歳の門出「グル」が祝福
諏訪湖 神明小卒業生10年ぶり観察会

同谷市神明小学校を卒業する2006年世代卒業生、今年成人式を迎える卒業生の有志16人が出川小学校時代の総合学習で勉強した諏訪湖のオオシヅルの観察会を諏訪市と千歳町の諏訪湖畔で開いた。総合学習を指導していた日本野鳥の会諏訪の林正敏会長(70)の案内で、湖上を舞う「グル」の姿を目に焼き付け、二十歳の節目に、当時の仲間と一緒に「グル」に会えた。すくなくとも「グル」の姿を見ることができた。参加した同級生は、小学3、4年生にかけてと、6年生の時

総合学習指導の林さん案内
に、それぞれ担任を務めた名取砂由美(あづま)教諭(57)が、松本市野野小(野野)の字級で、総合学習「小鳥を通じた自然環境」に取り組んだ仲間。当時は、主に同谷市郊外の増穂小鳥の森で野鳥観察を行っていたが、学習の中で、林さんから諏訪湖に飛来する「グル」の存在や湖の自然環境を勉強し、諏訪湖にも足を運んだという。

林さんが、当時10歳前後だった児童の中から10年後も諏訪湖に「グル」が飛来していたら、みんなで見たい」という声が出たのを記憶しており、名取教諭を通じて、今年で二十歳を迎えた同級生に観察会を呼びかけたところ、目的の同谷市成人式を前に古里へ帰省した有志らが集まった。

参加した太田千晶さんは「こんなに大人数が集まると思わなかった。うれしい驚き」と笑顔。「総合学習で古里の自然の良さを勉強できた。当時は「グル」の姿を見ることができなかった。二十歳の節目にみんなで見られてうれしい」。教諭を目



平成27年(2015)1月11日付
長野日報掲載記事より

←成人式を機に「グル」に会いに来た同級生

「グル」がマンガに登場

「ちょっと質問ですが・・・」、「グルを見たいな!」、など漫画を見た全国の子どもたちから問い合わせがあり、反響の大きさに、びっくり!



■ 「こどもたちの彫刻コンクール」でグルの作品が金賞に

平成 22 年（2010）、県内外の小中学生を対象にした立体造形作品「こどもたちの彫刻コンクール」（主催・美ヶ原高原美術館、NBS 長野放送）が行われ、諏訪市立城北小学校（現上諏訪小学校）で当時 4 年生だった高林優悟さんが制作したオオワシ「グル」の彫刻が、小学校高学年の部で見事金賞を受賞しました。

応募総数 420 点のうち、諏訪湖のグル作品はこの 1 点だけで、異彩を放つ作品となりました。

優悟さんの実家は、諏訪市大和の高台にあり諏訪湖が一望できます。小学 2 年のとき「裏山の木にオオワシがいる」と母親光子さんの知らせで観察したのが最初。その姿は「天辺で君臨するように、まっすぐ諏訪湖を見つめていた」といい「ふだん目にする鳥とは全く違い、衝撃的だった」と当時の印象を語ります。

グルの彫刻作りの動機は、のちに「絵画教室」に通い、そこで彫刻コンクールのことを知り、印象深いグルの作品づくりを思いついたそうです。募集規定は高さ、幅、奥行が 50

cm 以内、素材は自由。そこで優悟さんは目いっぱいの大きさに挑戦、当時の優悟少年には難易度が高く、母親や絵画教室の先生の手助けなくしては進めなかったといいます。

まず胴体は新聞紙を芯に針金で巻いて整形し紙粘土で外周を覆いました。羽は裏山で採ってきたササの葉を使い、グルの頭部から翼、尾に至る各部位に合わせて整形。乾燥による葉のねじれなど一枚ずつ修正して接着しスプレーで着色、この羽づくりが一番大変だったそうです。象徴的な嘴は黄色い油粘土で質感を出し、脚は紙粘土に絵の具で着色、眼は松ぼっくりのカサを使うなど、約 2 カ月かけて独創的な作品を完



見事な出来栄え作品「グル」

成、これが受賞作品でした。

優悟さんは現在、埼玉県内の大学に通う 4 回生。「私はグルに対し、なにか運命的なものを感じるのです」と語る。それはグルが救助された平成 11 年（1999）に生まれ、そして自身が進学で諏訪を離れた平成 30 年（2018）がグルの去った年、「グルは私に色々なことを考えさせ、気付かせてくれた、それはとても大きなことでした」と述べています。



高林優悟さん

岡谷市の二木奈保さんは、林正敏さんが「グル」を飼育中、ずっと見続け採血にする場にも立ち会われ、その感動を短歌に残し、歌集も出されました。

岡谷市 二木奈保（故人） 歌集「梓弓」より

一月四日諏訪湖に溺れし大鷲は君の廃屋に保護されている
 老木の木根に似たる足指の大鷲は若き雌なりという
 五十メートルの紐つけてなす大鷲の飛翔テストに回復たしか
 七週を君に飼われし大鷲が湖畔の畦より今し放たる
 保護されて飛翔の力おとろえし大鷲は北へ渡り得たりや
 嘴と足指をテープに巻かれたる大鷲は灯に円ら眼を開く
 この冬の忘れ難かる一つにて大鷲の血の淡き薔薇色
 大寒を過ぎて嬉しき便りあり君が保護せし大鷲帰る
 後頭の白き斑と脚の鑑札を認めて紛れなき去年の大鷲

茅野市 細川えい子 短歌「天象」より
 氷原にさかりて孤影をおく大鷲の嘴 一点の黄
 巨きとふ哀しみあらむ氷上を翔つ大鷲の初列風切
 群るるなき一生なりけり大鷲の北帰は風を友とするべし
 退きゆく氷を追いて北帰する大鷲はつひに陸を求めず



上田市 矢島渚男
 鷲を待つ眸真直な少年と
 大鷲を待つ湖際の葦となり

上田市 矢島昭子
 大鷲の飢えしづかなり湖と山

上田市 上澤樹實人
 鯉攫ひ大鷲落葉松山に消ゆ

■ オオワシ「グル」が大きな絵手紙となる

地元で絵手紙を親しまれていた方が「グル」を題材に絵手紙を描かれました。

絵手紙の教室を開いている岡谷市の林フク子さん、教室に通う下諏訪町の大和とし子さんの協力を頂き、子供たちにも見ていただくように岡谷湊小学校で絵手紙を展示していただきました。

期間 令和3年10月25日（月）～ 10月29日（金）

場所 岡谷湊小学校校舎内廊下展示スペース 高さ1.45m×長さ7m

展示 岡谷市 林フク子さんの作品12点

下諏訪町 大和とし子さんの絵手紙

林正敏さんが作成した原寸大の「グル」の型紙



作品展示の前で、左から林正敏さん、大和とし子さん、林フク子さん



作品展示の様子、手前が、林フク子さんの作品



ぼくの背と同じくらい大きさだ！



横に並んで「グル」の翼の幅と比べてみよう

厚紙で造った原寸大のグルの型紙の前でオオワシ「グル」の大きさにはびっくりされたようです。

湊小学校の児童は、大きな絵手紙を興味深く見ていました。



休み時間にやってきた子供たちは絵手紙を真剣に見ていました

どうして諏訪湖にやって来たのかな～との質問がありました。

平成30年3月に北帰行してから諏訪湖に姿を現^{あらわ}していないことは残念です。

諏訪湖にオオワシ等の渡り鳥がたくさん来て欲しいと話していました。



林フク子さんの作品 オオワシ「グル」さんありがとう 図の大きさ 45 cm×88 cm

感動をいっぱいありがとう 林フク子

諏訪湖^{おぼ}で溺れていたオオワシ「グル」を野鳥の会の方が助け49日間の保護^{かげ}のお陰で元気になり、それから19年間遠いシベリアから1羽だけで諏訪湖にやってきていた「グル」。「きっとグルの恩返し^{おんがえ}だね」と「グル」ファンが冬になると待ちこがれ、滞在^{たいざい}している間は心温まる日々でした。19年目の2月中旬、「近くで見られるから早く来て」の連絡で山に登っていくとなんと10mも離れていない木の間にじっと止まっていたんです。あの時の雄姿は本当に感動そのものでした。 オーイ、「グル」さん元気で大空を飛んでいますか？また会いたいな一。

「グルの絵手紙展・19年間ありがとう」下諏訪町大和とし子さん開催

平成31年（2019）3月26日、下諏訪町在住の大和とし子さんが描いた「グルの絵手紙展」を開催しました。

「グル」は毎年、諏訪湖に飛来してくる国の天然記念物オオワシです。20年前の冬、天然記念物に指定されている大鷲が諏訪湖で衰弱しているのを野鳥の会の方が49日間、手厚く介抱し放鳥したところ毎年シベリアから一羽で諏訪湖にやって来ていました。でも20年目の節目となる今季は、「グル」に会うことができませんでした。大和とし子さんは「どうしたのだろう」と考えつつ、知り合いに貰った写真やご自身で撮った写真を見返しながら「グル」の絵手紙を描かれたそうです。



喫茶店で絵手紙展



今日の獲物は大きいぞ



イーイピースピース
ダブルピースだぜ



いい風をとらえて旋回夕陽を受けた羽が茜色に輝きます

長い間ありがとう 大和とし子

冬、諏訪湖を歩いていた時、大きなカメラを抱えたおじさんに「あれがグルだよ」と教えていただいたのが「グル」との出会いでした。

「グル」は大和と高木を栖にして毎年越冬してました。たまたま私は高木に住んでいるので朝起きると家の中から「グル」が鉄塔にとまっているかまず確認。姿が見えると急いで家事を済ませ、皆のいる所へ向かいます。運よく狩りする場面を見られたら、すごく感動します。勇猛果敢で逞しく優雅ですらあります。元気をもらえます。私の中では「グル」はいつでも大空を飛んでいるのです。

長い間ありがとう「グル」！！

■ 最高級の腕時計にグルの舞い姿

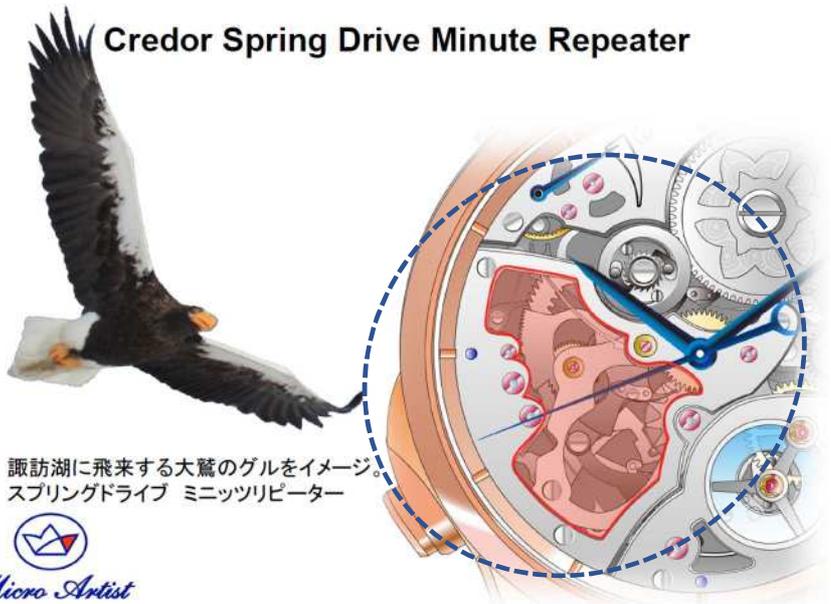
完成まで4年、価格は3,465万円

この腕時計はセイコーエプソンの塩尻事業所、「信州時の匠工房」で製作されたミニッツリピーター（商品名）です。日本らしい最高峰の機械式腕時計に挑戦したもので、構想から完成まで4年、数名の匠によって平成23年（2011）に手造りされました。その価格はなんと3,465万円、鐘を打って時を知らせるなど極めて高度な技術が結集されています。

そしてスケルトンの文字盤には「グル」をイメージしたデザインが刻まれました。これについて同社では「諏訪湖に1羽で飛来するグルの孤高な感じと、日本昔話の鶴の恩がえしのように、地域に根差す心は当社にも通じます、その思いを表現したかった」と言い、さらに「夕日が沈む諏訪湖、飛び立つ『グル』、信州の風景の美しさが感じられるよう、心を込めて製作しました」と語っています。



高級腕時計
ミニッツリピーター



諏訪湖に飛来する大鷲のグルをイメージ。
スプリングドライブ ミニッツリピーター

Micro Artist



「グル」のこんな飛び姿が
デザイン化された

■ 「グルの TV 番組」に努力、オペラ歌手の佐藤しのぶ

「グル」に魅せられた人、日本を代表したソプラノ歌手の佐藤しのぶさんもその一人です。佐藤さんはウィーン国立歌劇場での「蝶々夫人」を皮切りに、各国の主要な劇場で小澤征爾、シャルル・デュトワほか幾人もの著名な指揮者のもとで歌い、豊かな才能と歌声は多くの聴衆を魅了しました。

その佐藤さんが諏訪湖のオオワシ「グル」を知ったきっかけは岡谷市のバリトン歌手、吉江忠男さんでした。二人はこれまで20回も全国ツアーでコンサートを開いてきた間柄、佐藤さんは4年間もほぼ毎月吉江さん宅にレッスンに来ていたそうです。

練習の合間、二人は幾度となく諏訪湖畔で散歩をし、できれば一周歩く計画も。そして平成27年(2015)冬、諏訪湖畔で吉江さんから「この湖にはオオワシが飛来するが、そのワシは湖で弱っていた所を発見され僕の知人らが救助した「グル」という名のワシ、放したあとも毎年飛来している」と聞かされました。

これを聞いた佐藤さん「それは、素晴らしい話ね!」とすごく感動したそうです。日本の民話「鶴の恩返し」に由来した團伊玖磨のオペラ「夕鶴」では、畏にかかった鶴を助けた百姓の前に、人間に化身し「つう」という名の女性が現れる物語。佐藤さんはその「つう」役を白衣をまもって演じた歌手でもありました。吉江さんの話をじっと聞き入っていた佐藤さんは、「グル」を「夕鶴」に重ねあわせていたのかもしれませんが。

その後、グルの写真展も見学。思いを一層深めた佐藤さんは、自身がパーソナリティーとして約20年つとめるテレビ神奈川の「佐藤しのぶ 出逢いのハーモニー」で、グルを取り上げたいと局のチーフに相談しました。番組はその道に精通したスペシャリストを招き佐藤さんと対談するものです。結果は諏訪湖が距離的に離れていることがネックとなり提案の実現は進まなかったそうです。当時を思い出し吉江さんは「佐藤さんはずいぶん努力されていた」と語ってくれました。

音楽界で華々しく活躍した佐藤しのぶさんでしたが、令和元年(2019)9月29日、多くの音楽ファンに惜しまれながら亡くなりました。(享年61歳)



全国ツアーの会場で聴衆に応える佐藤しのぶさん(左)と吉江忠男さん

青空に虹・黄の鮮やかな輝きを放った木々の葉も落ち静寂の世界が広がった。オオワシが、歳月の風雪を刻んだ老木の幹に降り立つ。今着地したのか、今飛び立とうとしているのか、くちばしはキリリと締まり、大きな眼は前方をじっと見据える。飛び立つ未来に何が待つのか。黒と白のシンプルな美しさ、くちばしと脚に柔らかな冬の柿色を配し、なんの無駄もなく、甘えもなく、完璧なバランスを持って老木の幹に立つ。気候は温暖、人は開放的な横浜の港町から八ヶ岳西麓、標高 1,300 メートルの諏訪地方に住まいして、14 年目の冬を迎える。「何でこの寒い所に？」と何度聞かれたことか。「呼ばれてきたみたいですよ」と曖昧に伝えてきた。が、このオオワシに出会って、はっと気付いた。私の脚はしっかりと冬の梢に立っていただろうか。幼いあの頃の瞳は曇らず、まだ未来への夢と希望を持ち続けているだろうか。



人は一生をかけて布を織るようなものだと父から教わった。縦糸は人の力ではどうにもならず、生まれながらに与えられたもの。その縦糸に人生の出会い、さまざまな事件を横糸として織り込んでゆく。私の未熟な機織りを見つつ、父は白寿の歳、「大丈夫」という言葉を遺し、八ヶ岳から旅立って行った。父を亡くした今、父が語らなかつたことに思いを馳せている。

横糸の色ばかりを気にしていたが、はたして、横糸を作り上げる糸に心を配っていただろうかとの思いである。より強く、よりたおやかに、よりしたたかに、より美しく、糸を縫い合わせねば。

遠く厳寒のロシアから飛来したオオワシは諏訪湖に降り立った。何かで傷つき、この地で終焉をと覚悟したかもしれぬオオワシは、人に助けられた。春になって故郷へ飛び立った彼女は、冬、再び諏訪湖へ飛来し、私たちを感動させる。傷ついた個への優しい思い、絶滅してゆく「種」への地球的規模の思いが動きだした。

日々織る布は、私の命、私の人生だけでなく、果てしない宇宙にぽっかり浮かぶ美しい地球と、そこに息づく生物全てとにつながっていた。綿々と受け継いできた個の命のバトンに籠められた先人の知恵に、今こそ気付かねば、と思う。

(平成 24 年 12 月 1 日、長野日報掲載エッセイから)

小林 節子 フジテレビを退社後、フリーアナウンサーとなり、「レディス 4」の司会を 20 年勤める。長野県原村へ移住し、現役アナウンサーとしてテレビ、ラジオで仕事を続ける傍ら、雑誌での対談、講演会、シンポジウムなど行っている。また「八ヶ岳の美しい環境を継承する会」の副代表として、環境と農業問題にも取り組んでいる。

冊子でご紹介したオオワシの飼育はまったくの偶然でした。はじめ現場に掛けつけ衰弱したワシを見た方々は、鳥に詳しい数人に救助の連絡をしたそうですが、どなたも不在。面識がなかった私とたまたま連絡がついたと後で知らされました。飼育日記でも触れましたが、プロの皆さんの適切なご指導や緊急時の連携プレーがあって、はじめて貴重な命が救えたことでした。この冊子をご覧の皆さんにはオオワシが助かった経緯についてはご理解頂けたかと思えます。



オオワシを抱え「必ず助けてあげるから」

私はこの冊子の執筆を進めるうちに、オオワシ「グル」が実に多くの人々に勇気や希望を与え、さまざまな創作意欲を喚起させ、諏訪湖のあるべき姿を考えさせてくれたことを思うとき、助けられたのは実は私たち人間の側ではなかったかと思い直しました。

民話は別にして、自分が知る限り救護した野鳥がこんなにも影響を与えた事実はほかにありません。振り返れば私はワシとの妙な縁を感じます。5歳の頃から勝手場の黒い床一面に、チョークでワシの頭部ばかりを飽きずに描いていました。虚弱だった自分が強いワシに惹かれたのでしょうか、70年以上前の古い話です。後に30歳のとき野生動物の観察グループ「シートン会」の会長をしていた私は、仲間の案内でイヌワシの営巣を見ました。そこはV字型の谷間で、約600m先の岩だなに巨大な巣が見えました。

観察するうち親鳥が巣をあける時間もわかり、ごく短時間ですが巣の真上から観察することにしました。決行の日、現場の山は約35度の急傾斜、そこを下ると一気に断崖絶壁。それも垂直以上のオーバーハングのため、逆さまに身を乗り出さないと下の巣は見え、やむなくロープで自分の足腰をきつく縛り、仲間の支えで崖の突端まで滑り出て1羽のヒナと周囲に転がる餌の残骸を確認しました。その間およそ4~5分。一帯を君臨するもの凄い生き物の巣を直に観察することができました。その後、諏訪湖で死んだオオワシを解剖し自分ではく製（7頁参照）にしたのが41歳。そしてグルを介護し、放鳥したのが55歳、さらに約130年前のオオワシの学術標本（桐の箱入り）が縁あって家に来たのが61歳。また統廃合で廃校となった岡谷小学校の理科準備室に置かれていた2羽のイヌワシの剥製を塩嶺閣でひきとり、自分で修理、展示したのが68歳、そして今回の冊子の執筆を求められたのが77歳です。

“鳥止めのない人生”を過ごすなか、折にふれたワシとの接触は、チョークを手にしていた幼い日の自分の願望だったのでしょ

編集後記

平成8年(1996)以来、寒さの厳しい諏訪湖にやって来てくれたオオワシ「グル」が、平成30年(2018)3月にロシア方面に北帰行して以来、その翌年から諏訪湖への飛来は確認できていません。冷たい湖中で衰弱していた所を助けられ、手厚い介護を受けた恩を忘れないかのように、23年間も諏訪湖にやってきてくれました。その後この湖をこよなく愛してくれた「グル」が諏訪湖の上を飛ぶ雄姿を見られないのは非常に残念です。

長野県諏訪地域振興局により将来の諏訪湖の在り方の方向付けをする「諏訪湖創生ビジョン」が策定されたのは平成30年3月のことでした。おりしもその時が「グル」最後の渡去となってしまいました。どなたかが言われたように、オオワシ「グル」は雄大なロシアの自然を代表した親善大使だったと思います。林正敏さんとこの冊子を編集するうちに、明るい話題を提供し、諏訪地域の人たちに勇気を与え、諏訪湖のあるべき自然を考えさせてくれたオオワシ「グル」の再来を期待せずにはられません。

地球規模での感染症、新型コロナの蔓延が続くこの3年目の今年は「諏訪湖創生ビジョン」見直しの年でもあります。「グル」に続くオオワシが再び定着するような、そんな諏訪湖の環境保全に努めていきたいとの思いを強く感じたところです。

八幡 義雄

主な参考資料・文献

「鳥獣行政のあゆみ」林野庁/「日本鳥類大図鑑」清棲幸保/「長野県版レッドリスト」長野県/「鷺と鷹」平凡社/「渡りの足跡」梨木香歩/「窓」窓の会/「支部報・いわすずめ」日本野鳥の会諏訪支部

最後にこの冊子作成に当たりご協力を頂いた方に対し感謝申し上げます。(敬称略)

作成する費用の一部を補助していただきました

岡谷エコーロータリークラブ、マリオくらぶ

介護などに関するご指導やご協力を頂きました

岡谷動物病院院長・佐々木厚他スタッフ皆さん(岡谷市)、山階鳥類研究所、佐藤文男元研究員(千葉県我孫子市)、神和夫(北海道立衛生研究所)、日本野鳥の会諏訪支部、北澤千文他会員

保護活動にご協力頂きました

諏訪建設事務所、諏訪地方事務所：現諏訪地域振興局(以上諏訪合同庁舎内)、諏訪湖博物館・赤彦記念館(下諏訪町)、スワテック建設(株)(諏訪市)、中部電力(株)下諏訪営業所、東京電力(株)、岡谷エコーロータリークラブ、望月明義(安曇野市)

写真、絵図、話題など提供して頂きました

表紙絵：竹中敏(茅野市) 裏表紙挿絵：林正敏(岡谷市)

岡谷市、岡谷市立神明小学校、セイコーエプソン「信州時の匠工房」、斎藤慶輔(北海道釧路湿原野生生物保護センター)、円山動物園(北海道札幌市)、狩猟鳥類掛図(農商務省、日本鳥学会)、朝日小学生新聞(東京都中央区)、長野日報社、市民新聞社、個人協力・小林俊紀、高林優悟、中島忍、中戸川夏子、宮坂忠彦(以上諏訪市)、阿部正則、大和とし子、立石秀明(以上下諏訪町)、加藤静、酒井千栄子、武居薫、林フク子、林正敏、吉江忠男(以上岡谷市)、小口浩史、藤沢義昭(以上辰野町)



メモ

メモ

クラス	学校 年 組
なまえ	

書 名 諏訪湖を愛したオオワシ「グル」の記録
(非売品)

林 正敏 編著

八幡義雄 編集、沖野外輝夫 監修

発行元 諏訪湖クラブ

住所：392-9917 諏訪市城南二丁目 2362

発行日 令和4年1月

発行に当たっては「長野県地域発 元気づくり支援
金」の補助を受けています